二次元ドリームノベルズ

装刃戦姫 サクラヒメ

フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女

18 未満

有機企画

挿絵／緑木邑

試し読み版

登場人物紹介
Characters

建宮流華（たてみやりゅうか）
「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する。

クリスティーナ・エイミス
流華の親友で「装刃戦姫コーデリア」に転身する。

三城良平（みしろりょうへい）
流華の幼馴染にして恋人。

鬼蛙（おにがえる）（蛙坂蔵夫（かわずざかくらお））
オニグミを束ねる幹部。偽名を使って流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

第一回　サクラヒメ魔淫に堕つ　006
第二回　忍び寄る魔手　侵される日常　064
第三回　屈辱の地下バトル　公開羞恥地獄　110
第四回　学園フタナリ奉仕　惹かれていく心　161
第五回　恥辱に喘ぐお嬢さま　224
第六回　最悪の罰ゲーム　転落する薔薇の戦姫　291
第七回　ダブル戦姫　倒錯の射精遊戯　352
第八回　背徳絶頂　恋人に注がれる白濁　454
最終回　闇に沈む装刃戦姫　堕淫と恍惚の未来　492

第一回　サクラヒメ魔淫に堕つ

草木も眠る丑三つ時。

夜闇が人の世を黒く塗りつぶし、湖面が満月の光をたたえる。人々は床につき、街は静寂に包まれていた。聞こえるものといえば木々のざわめきと虫の鳴き声くらいだ。

そんな夜更けに一人、山中にかかる鉄橋でトラブルに見舞われた女性がいた。運転していた軽自動車は柵に衝突し停車し、ボンネットから黒い煙を噴き上げている。

彼女は車のそのすぐそばで焦燥に駆られていた。会社帰りのスーツはところどころ破れ、忙しなくスマートフォンの画面をタップしている。

「どうして⁉　どうして繋がらないの⁉」

電波が圏外で、立ち往生しているように見えるがそうではない。二日ぶりに帰宅する彼女を待ち受けていたのは、百鬼夜行絵巻で描かれているような悪鬼だった。

「ムダムダ。封鎖結界を張らせてもらったからよ。ま、人間に言っても理解できないだろーがな」

「ヒイッ！　こ、これって現実なの？　じ、冗談でしょ⁉」

「どっちでも好きな方を選んでいいぜ。結果はこのオレ、牙噛（きばがみ）さまの晩飯一択なんだからよ」

女性の前に立つのは大型トラックほどもある巨大な蜘蛛の化け物。闇に紛れて人を喰らう妖魔、オニグミだ。古来から不審死や行方不明者の大半は彼らが原因であり、人知れず人間をエサにしているのである。

「若い女の肉は美味いんだよなあ。ゲヘヘ、骨の髄までしゃぶらせてもらうぜ」

「い、いや……だれか助けて……お願いだから……」

顔面蒼白で歯の根が合わない女性。助けを呼ぼうにもここは山の中。連絡を取る術もない

牙噛はその様子に舌なめずりし、トラバサミめいたアゴを開いた。口内からは腐臭の混じった吐息がこぼれる。

「だ、だれか……だれかあああああああッ！」

「いただきまああ～す！」

一息に飲み込もうとする大蜘蛛。

だが、絶体絶命の瞬間、一本の小太刀が投擲された。それは牙噛の額に突き刺さると青白い雷光を放つ。

「ギャアアアッ!? な、なんだこりゃあッ!?」
突然の一撃に痺れながら叫ぶ。慌てふためく悪鬼の前に音もなく、一人の少女が現れた。
「抵抗できない女性を狙うとは……恥を知れ」
ロングの黒髪を風になびかせ、セーラー服を着こなす。月明かりに負けない美貌だが、切れ長の双眸はあらゆる者を拒絶するかのように鋭い眼光を放っていた。スリムな身体だが、胸部だけかなり豊満で、さらしで押さえられた肉毬が息苦しそうである。
艶麗という言葉を体現したような少女だが、ただ者でないことは明らかであった。化け物を前にわずかな畏れすらない。
「その霊力……まさか……まさかテメェ!」
「神器転身!」
少女は胸元から深紅の結晶を取り出し言霊を込める。結晶は戦う意志を受け止めると、まばゆい閃光を放った。
直後、鉄橋は太陽のごとく輝かしい光に包まれた。セーラー服が分解されると墨色の甲冑に再構築。柔らかな胸乳を除き、上半身に装着される。下半身には緋色のミニスカートが出現し、可憐にひらめく。
手には籠手、脚にはすね当て、肩には袖、頭には兜の角をモチーフにしたヘッドギアを

纏う。瞳の色は黒から赤へ変わり、歴戦の武将のごとき眼光を放つ。最後に身の丈三倍はある大太刀、『風明刃』を両手で掴み、少女は白刃を煌めかせ名乗りを上げた。

「人に仇なす悪鬼羅刹よ塵芥に還るがいい！　魔を断ち祓うは神器の刃！　装刃戦姫サクラヒメ、推して参る！」

そう、彼女こそ破魔の力を秘めた神器結晶で転身する姫武者。オニグミに対抗し、人の世を守るために生み出された変身ヒロイン、装刃戦姫なのだ。

「チッ。いいところだったのによお！」

食事を邪魔され怒りに震える牙噛。激しい怒気で空気が歪む。

「オレがだれだかわかってんのか⁉　八大鬼は鬼蜘蛛をつかさどる牙噛さまだぞ！　テメェなんぞ五秒でゴミクズにしてやるぜ！」

八大鬼とはオニグミを束ねる幹部の名称である。その力は圧倒的で幾人もの装刃戦姫が敗北を喫してきたのだが――

「それがどうした。八大鬼など何度も切り結んでいる。貴様はあの鬼蛙よりも強いのか？」

「鬼蛙……クソッ！　あの根暗野郎、ガキを図に乗らせやがって！　いいぜ、相手になってやらあ！」

微塵の動揺も見せない少女に本能が警告を告げる。だが、鬼が人を恐れることなどあっ

てはならない。死神の鎌のように八本脚、その先端に生えた爪を肥大化させる。幹部としてのプライドが後退を許さない。
「死ね死ね死ね死ね！　死ねえええぇぇ！」
凄まじい速度で三百六十度、全方位から爪が襲い掛かる。一撃、一発が鋼鉄すらも引き裂く鬼の全力だ。サクラヒメは身じろぎ一つせず牙噛は勝利を確信する。
「もらったぁッ！」
自信家の悪鬼は気づいていなかった。相対する敵が並みの戦姫ではなく、日本対魔協会最年少で神器結晶に適応した最強の戦姫、装刃戦姫サクラヒメであるということを。
「愚かな」
身の丈以上の大太刀が目にも止まらぬ速さで振るわれると、脚の一本が斬り落とされた。その衝撃と痛みで残りの爪も空を切る。
「ガッ⁉　な、なにイィィ⁉」
「遅いっ！　ハアァァアアアッ！」
刃が閃き、続けて二本、三本、四本と脚が斬り落とされていく。紫色の体液が噴き出しては地面を汚す。
「ぎゃアアアァァッ⁉　あ、脚がああああ！　オレの脚がああアァァッ！」

「ピーピーわめくな、みっともない。貴様それでも八大鬼か？」
「こっ、こっ、この糞女がッ！　舐めやがってッ！　許さねええェェェ!!」
殺意を全開にして爪を叩きつける牙噛。だが、力の差は歴然だ。白刃が舞い踊るたびに体液が飛び散り、五本目の脚が斬り落とされた。
「弱い者イジメはできても戦はできないようだな。鍛錬がまったく足りていない。このままダルマになるまで続ける気か？」
「ガッ！　がああァァ……！　くそッ！　くそッ！　こ、ここは一先ず退いてやるぜ！次に会った時がてめえの最期だ覚えてやがれ！」
たまらず尻から噴き出した糸を木々に繋ぎ留め、巻き取り彼方へ離脱しようとする八大鬼。
「ハッハッハアッ！　またな糞女！」
封鎖結界も解除し、なけなしの虚勢で装刃戦姫を挑発する。弾丸めいた速さで鉄橋から遠ざかっていく。
しかし、サクラヒメは兎のように跳ね、すでに牙噛の上を取っていた。
「次？　貴様に次などない」
「ナッ!?　なにイイィィ!?」

甲冑を纏っているとは思えない電光石火の早業。鬼の動体視力でも追いつけないスピードだ。

姿を捉えた時にはもう遅く、空中で急な方向転換ができずに狼狽する牙噛。数秒前までの余裕はもうどこにもない。

「ま、待て！　待ちやがれ！　そうだ！　あの女はあきらめる！　それに欲しいものは何でもやるから見逃してくれ！　大金持ちになりたくないのか⁉」

「黙れ」

「オレさまは他のカスどもとは違う！　こんなとこで死ぬ定めじゃねえ！　ねえはずだ！」

「黙れと言ったはずだ見苦しい！　消え失せろ鬼蜘蛛！」

「ひっ、ひぃいいィィ！　いやだいやだいやだあっ！　幹部になったばかりなのに！　こんなガキに！　いやだあああアァァッ‼」

悪鬼の命乞いに貸す耳などあるはずもない。満月を背に、風明刃が振るわれる。刀身が青白く光ると、斬撃が幾重にも重なり牙噛の身体を切り裂いた。

「討滅奥義！　花鳥風月・百八式‼」

「ギャアアアアアッ！　アアアアアアッ！」

牙噛の身体が百八つに分割、闇の魂が浄化されると完全に消滅した。
刃から体液を払うと鉄橋に舞い立つサクラヒメ。残心を決めると女性へ近づき、額に触れる。
「今夜あったことは悪い夢だ。何も気にすることはない」
「あなたは一体――」
その言葉を最後に眠りに落ちる女性。神器結晶の能力で記憶の消去を行った反動だ。スヤスヤと寝息を立て、目が覚めた時にはすべて忘れているだろう。
身体に異常がないことを確認すると、サクラヒメは対魔協会に連絡を取り、事後処理班を寄こすように伝えた。
あとの面倒ごとは彼らがやってくれるだろう。
（父さま、母さま、また一体鬼を斬りました。八大鬼、鬼蛙の首までもう少し。二人の無念、必ず晴らしてみせます）
亡き両親に思いをはせ、帰還する装刃戦姫サクラヒメ。月光照らされる姿は一振りの刃のように煌めいていた。

◆◆◆◆

「おはよー」

「おはようございまーす」
校門から快活な声が聞こえてくる。
ここは岩戸学園。昔ながらのしきたりを重んじる古風な学園だ。文武両道をモットーに多くの生徒が青春を謳歌している。
「建宮会長！　この資料はどうしたらいいでしょうか！」
「ああ、そこに置いておいてくれ。あとでチェックしておく」
「はい！　ラジャーです！」
体育会系の男子生徒が資料を机に置き、ダッシュで教室をあとにする。
建宮会長と呼ばれた女子生徒はやれやれといった様子で肩をすくめた。
装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華は学園に通う生徒だ。生徒会長と剣道部部長を務め、二足のわらじに忙しい毎日を送っている。
「ふぅ、それにしても今日は日差しが強いな」
窓から差し込む太陽は早朝からギラギラと輝き、欲しくもない熱線を存分に振りまいていた。季節は夏。
今年もまた暑くなりそうである。
流華も衣替えを行い、セーラー服も半袖だ。無地のスカートは少し短めで、抜群のスタ

イルと合わさって清涼感と、透き通るような美しさを体現していた。黒髪が風になびく姿に男女問わず見惚れてしまう。

と、そこへ男子生徒が現れた。

「おはよう。今日も暑くてゆで上がっちゃうよ」

「おはよう良平。しかし、これしきのことで泣き言を言ってはいかんぞ。心頭滅却すれば火もまた涼しだ」

「あはは、建宮さんはいつも元気だね。夏バテしているところなんて見たことないよ」

「鍛えているからな」

声をかけるのは流華の幼馴染にして恋人、三城良平。丸眼鏡をかけた小柄な少年だ。流華と同じ剣道部に所属し腕前はイマイチだが、人のことを思いやれる心の優しい少年である。

両親の死で街を離れていた流華と岩戸学園で再会し、最近交際を始めたばかりである。

「そういえば、ぼくの剣道の腕ってどのくらいなの？　建宮さんを十としたらどのくらい？」

「〇・五といったところだな。相当に鍛錬が足りていない」

「う、まだまだ先は長いなー」

「ふふ、わたしを守るんだろ？　ならばもっと精進しないとな」
少年の想いに口元を緩める黒髪乙女。二人で過ごす時間は戦いのつらさを忘れられる大切なひと時、流華にとって彼は日常の象徴だった。
この何気ない日々を失いたくない。
入学してからは復讐のためだけではなく、良平や学園のみんなの平和を守りたいと流華は考えていた。
しかし、自らが装刃戦姫であることは絶対に口にはできない。言えば周囲の人間をオニグミとの死闘に巻き込んでしまうからだ。
牙噛との戦闘も霊力を全力解放したから勝てたのであって、見た目ほど楽な勝利というわけではない。神器結晶を酷使した反動で筋肉痛がひどいが、痛みを隠して気丈に振る舞う。
「しかし、建宮さんではなく流華だろう。わたしたちは恋人同士なのだぞ。そんな他人行儀でどうする」
「でもまだ名前呼び捨ては慣れないっていうか……ちょ、ちょっと恥ずかしいし……」
「良平、大和男子だろシャキッとしろ！　ほら、りゅ・う・か・だ。りゅ・う・か」
「り、りゅう……か……」

「声が小さい！」
「りゅ、流華っ!!」
「うむ！　それでこそわたしが認めた男だ」
大声でクラスメイトの注目を集めてしまうバカップル。気弱な良平はモジモジと赤くなっているが、流華はとても満足した様子である。
気っ風のいい建宮会長は人の目など気にしないのであった。

◆◆◆◆

放課後。
部活と生徒会長としての業務を終えた流華は一人、街を歩いていた。良平と一緒に帰らないのはパトロールも兼ねているからである。
西の空が茜色に染まり、日の落ちるこの時間帯は悪鬼たちの起床時刻でもあるのだ。
「うむ、特に異常はないな。そろそろ家に戻るか」
ひとしきり街を探索したあと、自宅であるマンションへ戻ることにする。
だが、帰路の途中で神社にさしかかった瞬間、急速に膨れ上がる妖気を感じた。
「――ッ、まさか……神器転身！」
神器結晶に霊力を込め、装刃戦姫サクラヒメに転身する。

禍々しい気配に全身が粟立つ。
（この妖気……あいつ以外にありえない……！）
急ぎ鳥居をくぐって石段を駆け上がり、境内に到着する。広々とした敷地の奥に賽銭箱の置かれた拝殿が見えた。周囲に人の気配はない。
妖気は確実にここから漂ってきていた。
「そこにいることはわかっている。姿を現せ！」
「せっかちなところは変わってないねサクラヒメ。牙噛を倒したからちょっとは成長したと思ったんだけど」
ぐにゃり、と石灯籠（いしどうろう）が歪み鬼が出現する。同時に外界から隔離する封鎖結界が起動し、空が血のように赤く塗り固められた。
「黙れッ！　貴様のたわ言に付き合うのも今日限りだ、覚悟しろ鬼蛙！」
「いきなり暑苦しいなあ。もっと平和的にいこうよ平和的に」
「ほざけ、どの口が……！」
サクラヒメと相対するのは身の丈四メートルもある蛙の化け物。オニグミ幹部、八大鬼の一体鬼蛙である。体表はぬらぬらと光り、いたるところにぶつぶつとした出来物をこしらえている。

額の部分からマッシュルームヘアーの少年が顔を覗かせ、声はそこから聞こえていた。
「父さまと母さまの仇……今日こそ討たせてもらう」
「おお、すごい霊力。若いっていいよね、レベルアップが早くてさ。ボクなんて歳取っているから物覚えが悪くって」
「覚悟ッ！」
風明刃を中段に構え、疾風のごとき速さで間合いを詰めるサクラヒメ。
鍛え上げられた霊力は瞬間的に、八大鬼幹部をも凌駕（りょうが）する。鋭い突きが無防備な腹部目がけてくりだされた。
（殺った！）
「って思うよね？」
しかし、あと一歩というところで大太刀が止まる。反撃を受けたわけではない。原因はサクラヒメ自身にあった。
「これは……ッ！」
「いつまでも対策を講じないおバカさんとでも思っていたのかな？　キミの情報はすでに把握しているんだよ。装刃戦姫サクラヒメ、いや建宮流華」
（コイツわたしの名を……!?）

でっぷりとした太鼓腹がスクリーンめいて光り、映るのは眼鏡をかけた少年の映像。家族で夕食を取る三城良平の姿であった。
「なぜ良平の姿が……き、貴様何をッ！」
「おっと、その物騒な刀はしまった方がいいと思うよ。彼の肩を見てごらん」
良平の肩にはホヤのような物体がへばりつき、ドクンドクンッと鼓動を打っていた。明らかな異物だが霊力のない人間には見ることも触ることもできない。不思議と肩が重く感じるくらいである。
「コイツは爆震蟲（ばくしんちゅう）。ボクの身に何かあったら作動するようになっているんだ。例えば刃物で怪我をするとかね」
「わたしを脅迫するつもりかこの卑怯者！」
「キミの選択肢は二つ。一つ、ボクを殺して両親の仇を討つ。一つ、恋人を救うためにボクの言いなり、雌奴隷になる」
「雌奴隷だと⁉　ふざけたことを……」
「クフフ、好きな方を選んでいいよ。前からその身体を好きなだけイジくりまわして、みたかったんだ」
「クッ……うぅ……」

「一分あげるから手早く決めてね。キミと違って暇じゃないから」
不気味な笑みを浮かべる鬼蛙をにらむ黒髪戦姫。雌奴隷という単語から凄まじい怖気を感じる。
（ここで斬れば奴の命を断てる……だが……良平は……良平の命は……）
極限の二択に苦悩する。一分の間に数多の逡巡が流れ、ようやくサクラヒメは答えを出した。
「貴様の雌奴隷になる……だ、だから良平には手を出さないでくれ……頼むこの通りだ……」
風明刃が音を立てて地面に倒れる。武器を手放した黒髪戦士は仇敵に向かって頭を下げた。
「クク、クハハハハ！　歓迎するよサクラヒメ。ボク好みの雌奴隷に調教してあげる」
（今は言いなりになってやる。だが覚悟しておけ鬼蛙……わたしは必ず貴様を討ち滅ぼしてみせる！）
恭順の裏で牙を研ぐ黒髪戦姫。夜闇がまた深さを増していく。
「じゃあ、オッパイを触らせてもらおうかな。当然、鎧は外しておいてね」
「そ、それは……ッ！」

「あれ、雌奴隷になるって言ったよね？　まさかこの程度のこともできないの？」
「わかっている！　今脱いでやるから待っていろ！」
サクラヒメは胸の布生地を大きく開くと、たわわに実った乳房をさらけ出した。柔らかな豊乳が狭苦しい鎧から解放され、プルンプルンと弾む。汗で濡れた乳頭は桜色に火照っていた。
（こんな下衆に肌を見せるなんて……）
大き過ぎるオッパイは周囲から好奇の目で見られることも多く、彼女の一番のコンプレックスだ。いやらしい視線を感じることも多々あり、そのたび不埒な輩は鉄拳で制裁してきた。
二つの膨らみを鬼蛙は下卑た視線で舐めまわす。
「すっごくデカオッパイだね。まるでメロンみたいだ」
「……それがどうした」
「こんな下品乳だと。クラスでも視姦されてるんじゃない？　学園でのキミってオナペットなのかな？」
「そ、そんなわけあるか！　愚弄するのも大概にしろ！」
「んー、まだ自分の立場がわかっていないようだね。恋人がはどうなってもいいわけだ」

「うっ、ぐ……」
凍りつくような視線と追及に口ごもってしまう。鬼蛙の望む答えを言わなければならないことは明白。
「ふんっ。まあ、そうかもな……」
屈辱に耐えどうにか言葉を搾り出す。良平が人質でなければ、もうこの瞬間にも斬りかかりたいくらいだ。
（くうっ……このヌルついた目で見られるとぞっとする。やはりコイツも他の男どもと同じか……）
自らを欲望のはけ口としてしか見ていない男性はサクラヒメにとって軽蔑すべき対象だ。良平以外の異性は今でも受けつけない。
「うんうん。奴隷はご主人さまに従わないとね。今から質問をするけど全部正直に答えてもらうよ。嘘をついたら……わかってるよね？」
「ああ。好きに聞けばいい」
乳頭を露出させたまま恥辱に耐える美少女戦姫。逃れることのできない羞恥質問が始まった。
「一つ目。キミって処女なの？」

「ッ!?　だれがそんなことを言うかッ！　ふざけるのもいい加減にしろッ！」
「はあーあ、今のは傷ついたな。傷つき過ぎて自殺しちゃうかも」
「わ、わ、わかった！　言う！　言うからやめろ！　わ、わたしはその……」
「その？」
「しょ……処女だ！　経験はまだない……」
「へー、まだなんだ。そのエロボディなら男なんて選り取り見取りだと思うけど」
「うるさい！　わたしの勝手だ！」
顔を真っ赤にしながら叫ぶ。同性相手でも言わない秘密を仇敵に知られ血液が沸騰しそうだ。
「次はもっと早く頼むよ。二つ目。ファーストキスはいつ？　それくらいはしてるよね？」
「まだだ……キスはしていない」
「あれ？　彼氏がいるのにキスもしてないの？　というかまだ一度もしてないんだ？」
「貴様らを殺すために修行の毎日だったからな。それに良平とは先週付き合い始めたばかりだ」
「オニグミ討滅の戦闘マシーンだと思ってたけどカワイイところもあるんだね。三つ目。自慰の経験は？」

「じ、じい？」
「オナニーのことだよ。やったことくらいあるでしょ？」
「おなにい⁉　破廉恥なことを……！　そんなことするものか！」
「ホント？　もし嘘だったら――」
「本当だ！　本当にしたことはないし興味もない！」
サクラヒメの言うことはおおむね事実である。学業や装刃戦姫としての任務で多忙な彼女は自慰をした経験がまったくない。
良平との交際で性に関する好奇心が少し芽生えている程度だ。
「まあいいけど、経験ゼロでボクのテクニックに耐えられるかな？　簡単に壊れないでよね、つまらないからさ」
「言われるまでもない。貴様ごときに感じることなど何もない」
チロチロと舌を動かしニヤつく鬼蛙。柔らかな胸乳を好きに陵辱できることにご満悦の表情だ。
一方、耐えるサクラヒメの瞳には、灼熱に燃える闘志があった。
（胸くらい好きに触るがいい。その腕がこの先もあると思わないことだな）
神器結晶に選ばれるのは心身共に強靭な人間のみ。これしきのことで絶望する装刃戦姫

ではなかった。
だが、鬼蛙が舌を伸ばし乳首に触れると、今までに経験したことのない痺れが身体を奔った。
「ひっ⁉　ひゃああんっ⁉　な、何をする！」
「味見だよ。まずはそのデカ乳からね」
粘ついた舌を乳首に絡めてクニクニと愛撫する。初歩の初歩の前戯。
経験不足な黒髪戦姫はそれだけでも身をよじってしまう。
「ふんっ！　少し驚いただけだ！　んっ、んん……赤ん坊のように舐めていろ！」
「へぇ、キミって乳首は桜色なんだね。だからサクラヒメって名乗ってるのかな？　乳輪はかなり大きめで、まるで牛みたいだよ」
「じろじろと見るな！　んくっ……っうぅ……」
「ここまでデカ乳輪だと水着からはみ出しちゃいそうだね。海でデートとかどうするの？　あっ、本当は視姦されたかったとか？　クフフ、純情ぶってるわりにムッツリスケベだったりして」
（い、言わせておけば……この変態め！　絶対に許さん！）
乳輪の大きさをバカにされ唇を噛む。乳首を舐め転がされたまま屈辱質問に回答させら

れる。
「この大きさだと九十六センチのGカップだよね？　合う下着を探すの大変じゃない？」
「ひ、百貨店でもないとなかなかな……あっ、ふぅぅ……ま、まだ舐めるつもりか……むぅぅ……」
「ホルスタインみたいなデカチチだと苦労も多いんだ。それじゃ、ちょっと本気を出そうかな」
「ふあああっ⁉　な、ななな、ああアアァぁ⁉」
鬼蛙は大口を開けるとサクラヒメの乳首にしゃぶりついた。舌先で触れるだけでなく、いやらしく下品に音を立てて乳房に吸い付く。まるでミミズとナメクジが合わさったような不快感だ。
ちゅぱっ♥　むちゅっ♥　ちゅううう♥
「はあああんっ！　ふひんぅっ、ああああ！　な、なにを……ッ！」
境内に甘い声が響き渡る。だらしなく感じてしまうデカチチ乙女の声。
先ほどまでの気丈な態度はどこへいったのか。切ない喘ぎが堪えられない。
「甘くておいしいよ。キミのオッパイ。ン……」
「ひゃあぁぁん！　うぅ……ひうっ！　はあぁん、っくあああ……や、やめろ……ッ！」

「処女のクセに感じ方だけは一人前だね。実は雌奴隷の素質があるんじゃないの？」
「くぅぅ……なんでこんな……こんな気持ち悪い男に舐められているのに、ひぅ、ウソだぁ……！」
「フフ、困らせてごめん。種明かしをするとボクの唾液には媚薬の効果があるんだよ。普通の女の子なら一舐めで絶頂するくらいのね。キミは霊力で耐性があるみたいだけど、いつまで続くかな？」
「びやくだと……この外道がッ！　悪趣味にもほどが……あ、あうっ！　ひゃあぁぁぁあ！」
媚薬舌技に嬌声を上げるデカ胸戦姫。頬を赤く染め歯を食いしばって耐えようとするが、理性がどんどん蕩かされていく。
キスもしたことがない彼女に鬼蛙の責めは刺激が強過ぎた。唾液がGカップ巨乳を濡らすたびに乳首が硬直してしまう。
股布の下で息を潜める肉花弁は淫蜜をこぼし、濡れそぼっていた。
「くっうぅぅうん、くぅう……はぁぁん！」
「オッパイが気持ちよくなってきたんじゃない？」
「そ、そんなわけあるか……こんなの……き、気持ち悪いだけだ！」

「ダメダメそんな言い方じゃ。雌奴隷としての心得がわかってないみたいだね。ここからはボクの命令通りにしゃべってもらうよ」
「勝手にしろ。その程度なら安いものだ」
何を言わされようと心までは屈しないと不敵に微笑む黒髪乙女。
鬼蛙は乳房から口を離すと耳元に唇を近づけ、囁く。途端にサクラヒメの瞳が見開かれ全身が紅潮した。
「じ、冗談も大概にしろ！　そんな……そんな恥ずかしいこと言えるわけがないだろう！」
「ボク何度も同じことを言うのは好きじゃないな」
「――く、くそ……わかった……言う通りにすればいいんだろう」
「クフフ、その通りさ」
蛙の大口からベロを伸ばし、再びGカップ巨乳を舐め上げる。張りのある乳房がテラテラと輝き、桜色の巨乳輪が淫猥な光沢を見せる。
声を殺し喘ぐ対魔少女に先ほどと同じ質問が投げかけられた。
「オッパイが気持ちよくなってきたんじゃない？」
「……ああ……と、とても気持ちがいいぞ……ふぅぅ……んくうううう……！」
「デカ乳を舐められるのがいいんだよね？　乳首も勃起してるよ？」

「ああ、スケベCD乳輪と……ぼ、ぼ、ぼ、勃起……乳首を責められるのが感じるんだ……はぅっ！　ああ……はぁぁ……」
「へぇ、じゃあこれからはデカオッパイでオナニーしないといけないよね」
「そうだ……わたしはだらしない牛乳女で、お、おなっ……オナニー願望のある淫乱なんだ……くっ、ンアアッ！」
望まない羞恥セリフにカァッと顔が熱くなる。二つの膨らみがたわわに揺れ、硬さを増す乳頭は淫らに色づく。
「思った通り真面目なふりして淫乱なんだね。学園オナペットのキミらしいよ」
「わたしはド下品デカ胸のオナペットだ……学園男子全員に欲情されるズリネタだ……こ、これでいいか！」
命令に従い卑語を口走る。媚薬の効果を忘れるほどの屈辱に、怒りがこみ上げてくる。
（くうぅ……なぜこんなセリフを……人の胸をなんだと思っているんだ！）
鬼蛙はひとしきり乳房を舐め尽くすと、ねっとりと口を離した。唾液が白肌に残り線を引く。
「ごちそうさま。次はコイツに奉仕してもらおうかな」
黒髪乙女にさらなる辱めが襲い掛かる。

鬼蛙の股間が盛り上がると、勃起したペニスが現れたのだ。太さも長さも人間のものとは大違いで、サクラヒメの鼻先に届くほど。

突然の事態に少女の思考は追いつかず、三秒置いてようやく悲鳴が上がった。

「き、キャアアアアアッ!!　な、なんだそれは!?　やめろ見せるな！　近づけるな！」

「なんだって、チンポに決まってるでしょ。知らないの？」

「そういう意味じゃないッ！　う、うわあああ！」

男性器など授業でしか知らない装刃戦姫に走る衝撃。

八大鬼、鬼蛙のイチモツは男性が見ても驚く代物であった。先端は赤黒く光り金棒のごとき威圧感がある。カリ首には恥垢がこびりつき、鼻が曲がるような異臭を放つ。竿の部分にはブツブツとしたイボが無数にあり、種付けをするという意思が前面に表れていた。

「これを口と胸に入れて、気持ちよくしてもらおうかな」

「本当にこれを口に入れろと言うのか……？　ありえない匂いだぞ……」

「サクラヒメ？」

「承知した！　やればいいんだろう！」

あまりの禍々しさにうろたえる美少女戦姫。しかし、雌奴隷に選択肢などあるわけがない。

「まず、おねだりしてもらおうかな。キミは何をしゃぶりたいの？」
「その……そ、それをください……」
「それって？」
「だから……そ、その股間のそれだ！」
「それってなに？　やる気あるの？」
「ぐっ……貴様……！」
意地悪くプレッシャーをかける鬼蛙。サクラヒメは恥ずかしさのあまり茹蛸のようになるしかない。
男性器の名称など口にするのも汚らわしい。
「ペ、ペニスのことだ。男性器を……舐めさせて欲しい……」
「ペニスじゃなくておチンポだよね？　おチンポが欲しいならちゃんとお願いしないと」
「……ッ！　お、お、お、おチ……ン……」
「ん？　今なんて？」
「お、チ……ン……ぽ、だ。これでいいだろう！」
「残念、よく聞こえなかったなー。もっと大きな声で言ってくれる？」
「〜〜〜〜〜〜ッ！」

わざとらしい口調に歯ぎしりする。自分が情けなくて仕方がない。
（このクズめッ！　だ、だが言うしかないのか……良平のために我慢するしか……）
そして、可憐な唇から最低の名称が叫ばれた。境内中に響き渡るような大声で。
「お、お、おチンポ！　おチンポ！　おチンポのことだ！　き、貴様のおチンポをしゃぶらせて欲しい！　うぅぅ……恥ずかしい……」
「はい、よくできました。そこまで言うならしっかりしゃぶってね」
「くっ、やってやる……！」
サクラヒメは両手でGカップ巨乳を持ち上げると肉柱をおずおずと谷間に挟んだ。血管がビクビクと脈動し、熱がオッパイに伝わってくる。
（生暖かくて気持ち悪い……このクズ！　クズクズ！　クズ鬼め！）
続いて亀頭を恐る恐る口に運ぶ。薄桃色の唇で先端に触れ、すりゅり、と口内に招き入れた。あまりの刺激臭に涙がこぼれそうで、恥垢の苦しょっぱさが舌をマヒさせる。
「ちゅく……んんむぅぅ……」
「あのサクラヒメがチンカスまみれのチンポを口に含んでいる……ああ、最高だよ！」
（く、くさい！　臭過ぎる！　なんて不潔なんだ……ッ！　うぐっ、うぐぅぅ……ッ！）
気力を総動員して吐き気を堪える。一方、鬼蛙はまったく意に介さず腰を振り、淫らな

水音が奏でられた。
「んぐっ！　ちゅぶ……んぶっ、じゅぶぶ、ごぶっ……ちゅぶぶぶうぅ〜ッ！」
「その調子だよ。噛まないように気をつけて」
「ちゅく……んぐぐ、ちゅぐううぅ……ッ！　じゅぐ、じゅぐ……んぶあぁ……ッ！」
「ほら、もっと亀頭を中心に」
「ふむぐっ、ちゅくう……ぺろ、ぺろ、ぺろりゅん……」
肉ロケットが口内を蹂躙する。動くたびにチンカスがこぼれ落ち、下水を凝縮したような匂いが加速する。
「無駄にデカい胸をしっかり動かしてね。おチンポに感謝を込めて」
「んっ、ちゅう……んんん……くうう……！」
黒髪戦姫はGカップ巨乳を押し付け奉仕する。両乳を上下に動かし、男の象徴に媚びを売る。
ムニュ♥　フニュ♥　ムニュニュ、ニュッ♥
「こうすればいいんだろう！　この変態……！　あむ、んくぅぅ……ちゅくうぅ〜」
「んー、まあこんなものかな。雌奴隷になるならもっと練習しないとダメだね。オッパイなんてチンポを擦るくらいしか役に立たないんだから」

（人の胸を玩具にしておいて、女をなんだと思っているんだコイツは！　これだからオニグミは……男は嫌になる！）

ホルスタイン巨乳を弄ばれ美少女戦姫は怒りに震える。無遠慮な視線を向けられたことを思い出し、異性への嫌悪感が湧き上がる。

良平がいなければすべての男を斬り捨てたい気分だ。

「ちゅ、ごほっ！　ぐちゅる……うえぇぇぇ……！　ま、まだやるのか？　うう、うぐうッ！」

「もちろん。ボクのおチンポはおいしい？」

「ごふっ……お、おいしい……す、すごくおいしい……んぐ！　けほ……むぶっ！」

「じゃあ、もっと笑顔でないとね。ほら笑って。スマイル、スマイル」

「ふぁ、ふぁぁ……はぶ……んじゅ、じゅぶぶぶん！　ちゅくうう……！　す、スマイル……」

「サクラヒメスマイル0円でーすってね。やってみせてよ」

「さ、サクラヒメ、スマイル……んぶ、ちゅう、ぜ、ぜろえんでしゅ……と、とても安くなっている……ん、ングウウゥッ！」

無理やりに口角を上げ、ぎこちなく微笑む巨乳乙女。惨めさに乳首がまた硬くなってし

まう。

「そういえばキスもまだだったよね。じゃあこれが一番目なんだ」

「グッ……何を言っている……ちゅぶ、あ、んぐじゅじゅうぅぅぅぅッ！」

「ククク、ハハハ！　恋人より先にカエルチンポとキスする女なんて初めて見たよ！　ねえ、良平くんに申し訳ないと思わないの⁉」

「んぐぅぅ……⁉　なっ、ああ、あ……！　う、うううるさいッ！　ちゅぶ……んあ……うるさい五月蠅いッ！　黙れッ！」

自分が何をしているか気づき、肉竿をしゃぶりながら怒鳴る乳牛乙女。ファーストキスを陰茎で済ませてしまった事実に心が揺れる。

（ち、違っ……わたしはそんなつもりでは……良平より先にチンポにキスなんて……これではまるで浮気をしているみたいじゃないかッ！）

その動揺を鬼蛙は見逃さない。ストロークを速めチンポキスの現実を刻み込もうとする。

「そろそろイキそうだよ。お口いっぱいにボクのザーメンを注ぎ込んであげるね」

「まっ、待て！　はぶっ、じゅぐぅぅ……せめて外に出せッ！　むぐぅ、だれが貴様の精液など……ふぐぅぅぅ〜〜ッ！」

願いは聞き入れられず、先走りのカウパーと唾液が混じり、唇を口内を蕩かしていく。

垂れた粘液が豊満な胸元を濡らしていく。
「や、やめろ！　出したら絶対に許さないぞ！　はぶっ、ちゅくぅぅ〜ッ！」
「好き嫌いはいけないなあ。雌奴隷なんだからザーメンはゴックンしないとね」
「や、やめっ……うぶぶ！　あああぁぁあああッ！」
全力で口内射精を拒絶する奴隷戦姫。しかし、悪辣なオニグミに手加減などありえない。肉竿にミミズのような血管が浮かび上がり、鈴口がヒクつくと、白い濁流（だくりゅう）が噴出した。
ビュク！　ブビュク！　ビュルルルウウッ！
「ふぐッ⁉　はぐッ⁉　おぐうう……う、うぐうぅうううぅう〜〜〜ッ‼」
生臭い粘液を口いっぱいに受け止める。肉棒が栓になって吐き出すこともできず、ザーメンを嚥下（えんげ）させられてしまう。
「ごくっ、ごくっ、うぐ……ぐぶぶ……げほっ！　えほっ、けほっ！　けほっ！」
「いい顔だったよサクラヒメ。おチンポの味どうだった？」
「はぁ……はぁ……ふん、べ、別に大したことはないな。この程度でわたしを辱めたつもりならおめでたいと言う他ないぞ」
「ありがとう。どこまでその調子が続くか楽しませてもらうよ」
装刃戦姫と八大鬼の視線がぶつかり合う。清廉な黒髪乙女にさらなる淫辱が忍び寄る。

◆◆◆◆

「こっ、これでいいのか？」
「そうだよ。ちゃんと腰を突き出してね」
サクラヒメは引き続き胸乳を露出させられていた。さらに、股間の鎧も剥ぎ取られ、スカートもまくり上げられてしまう。ショーツは転身の影響で身に着けていないため、鼠蹊部（そけいぶ）や若草のような茂みが丸見えだ。
（ぐっ、なんて格好を……とても良平には見せられない……）
両親でも恋人でもない相手に秘部を晒す屈辱、凄まじい恥辱に全身から火が出そうである。
鬼蛙はその様子をニヤニヤと眺めると、蛙の口内から呪符を吐き出した。薄汚れた紙に奇怪な文字が書き連ねてある。
「これがなにかわかるかな？」
「知ったことか。どうせろくでもないものだろう」
「ノリが悪いなあ。せっかくキミのために用意したのに」
「わたしのためだと？」
「そうだよ。ボクの趣味だけどなかなか試すことができなくてね。というわけで、はい」

呪符がペタリと股間に貼りつけられる。直後、ドス黒い発光と共に変化が起こった。
「⁉　こ、これは⁉」
股間の肉が盛り上がると肉棒が形成される。幹の部分にはミミズのような血管が浮かび、ドクンドクンと脈を打つ。先端は亀の頭部のようで皮の奥でピンク色の柔肉がヌメる。その下にはピンポン玉状の球体がフルフルと弾み、雄の匂いを放っていた。サクラヒメの股座（またぐら）に生えた物体、それはどこからどう見ても男性の陰茎であった。
「ひっ、ひゃあああああぁぁッ‼　な、なんだこれはッ⁉　鬼蛙！　わたしに何をしたッ⁉」
「フタナリチンポを生やしてあげたんだよ。前からキミには玉つき包茎チンポが似合うって思ってたんだ」
「ふ、フタナリ……？　玉つき……ち、チンポだと？　まさか、男の陰茎をわたしに⁉」
「キミが大嫌いな男と同じになれるようにね。これからはおマンコだけじゃなくチンポでも気持ちよくなれるよ」
おぞましい肉棒に黒髪乙女の血の気が引いていく。
雌奴隷になった時点で覚悟は決めていたが、これは予想外だった。
「ふざけるなこの鬼畜！　取れ！　今すぐ外せええぇえええッ！」

「できない相談だね。これからたっぷりとフタナリ快楽を味わってもらうよ」
肉竿へ手が伸びる。ブヨブヨとした指先が竿をつまむと、根元から亀頭の先端まで擦り上げていく。
「ひぐッ⁉　や、やめ……！」
触れられた反応で硬さが増し、血管がビクンと跳ねた。
「ふあああぁぁぁッ！　さ、触るな！　すりすり撫でるなぁ！　あぁああぁッ！」
「こうやって扱くと大きくなるんだよ。勃起って聞いたことない？」
「ふ、ふざけたことを！　ぼ、ぼっ……き……などするものか！　んくううう……！」
鋭い眼光で怒りを叩きつける。
だが、少女の想いとは裏腹に海綿体へ血流が送られ、陰茎全体が硬く膨れ上がっていく。完全に勃起した陰茎はまるで毒虫のようだ。
「イイ感じに怒張したね。立派だよサクラヒメ」
「褒めるなバカッ！　な、なにかヘンな感じが……」
初めて味わうフタナリ勃起に戸惑い、腰を揺らしてしまう。擦られるたびに甘噛(あまが)みにも似たむず痒さが尿道を走る。
「長さは十八センチってとこかな。男子から尊敬されちゃうね」

「うくっ、ふぐうううぅ〜、う、うるさい……知ったことか！　あぁぁ……はうあああああ！」
「きっと良平くんよりも巨根だろうね。クフフフ、彼氏よりもチンポがデカいってどんな気分？」
「こ、殺す！　そんなこと言うな！　あぁっ、ん……！　良平のことは関係ない……！　く、ん、くううぅうう！　疼くぅう……！」
サクラヒメの身体が火にくべられたように熱くなる。ペニスの大きさで恋人に勝つなんて考えもしなかった。
（うぅ……良平よりも大きいなんて、どうやって説明すればいいんだ……ひど過ぎる！　こんなの絶対に見せられない……）
初体験もまだなのにペニスサイズで勝ってしまうフタナリ戦姫。最悪の秘密を抱えさせられてしまう。
「……ッ、いつまでも触るなっ、撫でるなぁっ！　はく、あっくああ……」
「やれやれ、包茎のくせに偉そうだね」
「ほう……け？　んん、んぐうぅ……」
サクラヒメのペニスは勃起しても亀頭が皮を被ったままの状態、いわゆる仮性包茎であ

った。余った包皮の先っぽから尿道口だけが顔を覗かせている。
「被ったままじゃ恥ずかしいでしょ。剥いてあげるよ」
「き、貴様なにを……!?」
女性ならありえないはずの包皮剥きに冷汗が流れる。
鬼蛙は慣れた手つきでキノコ傘に触れると、皮を根元へ移動させた。
ズリュ！　ズリュ！　ズリュリュ！
「んくっ！　っあぁぁぁ！　あぁぁぁ、あぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！」
徳利のような皮がずり下がると、卑猥な音と共にピンク亀頭が露出した。
仮性包茎の装刃戦姫は敏感な部分をさらけ出され、肢体をくねらせてしまう。
「ん……ふ、く、ピリピリする……本当にわたしの身体なのか……？」
「まだ刺激が強過ぎたかな？　でも大丈夫。すぐに気持ちよくなれるよ」
指でスリスリとムケ亀頭を愛撫する。初めて外気に触れた亀頭は驚いたようにヒクついた。
「は、ひゃ、はあぁぁぁぁぁん！　こ、擦るな、こするなぁ……！　んぐっ！　はうぐうっ！　な、なんだこの感触は……！　あっくううううううううっ！」
全身を震わせて悶えるマスターベーション初体験の黒髪戦姫。Gカップスイカ巨乳を揺

らしながら、雌猫めいた声を上げていく。封鎖結界で決して外に声が漏れることはないが、淫猥過ぎる嬌声だ。

「このまま射精する悦びを教えてあげるよ」

「はうっ、くうぅっ！　ど、どこまでも下衆め……！」

「おチンポミルクをぶちまけてもらうよ。おマンコより先にチンポで雄快楽を覚えちゃったら、もうまともな女の子に戻れないね。ただの雌奴隷じゃなくてフタナリ変態のマゾ雌奴隷にレベルアップさせてあげるよ」

「やってみろ……！　そんなことでわたしは屈しないッ！」

「その強がりがいつまで続くか見ものだね。ほ～らほら、気持ちいいでしょ？」

「あっくあああああぁぁぁん！　ふくうううぅぅぅうううっ！　んひぃいいいぃ！」

ごしゅ♥　すりすり♥　しゅりしゅり♥

肉茎を擦られエロ声を出しまくる。魂の蕩けるような快美で意識が朦朧（もうろう）としてきた。指が亀頭を撫でるたびに狂おしい肉電流が神経を駆けずり回る。

「んっ！　くっ！　くああアァァアアアア！　だれが射精など……！　うぅうう……！」

「無駄無駄。我慢できるわけないって」

「貴様に何がわかるッ！　ああ、ふうう……くぁうううっ！　装刃戦姫を舐めるな……ッ！」

「わかるよ。だってこうするからね」

鬼蛙は指にたっぷりと唾液をまぶすと、露出亀頭に塗りたくった。呪力の混じった媚薬成分がフタナリチンポを発情させる。

「ふぁッ⁉　ヒッ⁉　ヒギイイィィィィィィイッ！　ああ……こ、股間が熱いいぃいいぃッ！」

「ほうら、もう限界だ。チンポがヒクヒクしてたまらないでしょ？」

「くっ、くうううぅうううっ！　き、気持ちよくなってしまう……！　感じてしまう……！　はぁあぁぁぁあぁん！」

唇を噛んで必死を射精に耐えようとするが無駄なこと。童貞の彼女ではツボを知り尽くした悪鬼の愛撫から逃れられない。

（こ、これでは鬼蛙と同じだ……あの白く腐ったような粘液をわたしも……！　い、いやだ……くうぅうぅぅう！）

喉で味わったばかりの臭気と熱。それと同じ醜態を自分が晒すことが恐ろしい。黒髪乙女の美貌が淫辱で歪む。

「んくっ！　んくっ！　くああ……熱いぃ……！」
「フフ、あと三十秒ってところかな。装刃戦姫サクラヒメの初射精、特等席で観覧させてもらうよ」
「ハァハァ……！　ハァ……アアアアッ！　お、鬼蛙、覚えていろ……！　ふぐっ！　ぐぅっ！　おっ、おおおオォオオオン！」
頭の奥でチカチカと星が瞬き、思考が真っ白になっていく。黒髪を振り乱すフタナリ戦姫へ、ついに決壊の時が訪れた。
「な、なんだこれは……！　んっ！　ああっ！　ああああっ！　く、くるっ！　上ってくるうぅぅぅぅぅっ！　くあああああぁぁああああぁっ！」
ピュ……プピュ♥　ピュピュ♥　ピュ……ピ、ブビュ♥　ブビュビュウウウウウウウッ♥
「くあっ！　やぁぁっ！　はうあぁぁあっ！　ひゃぁぁあああああっ！」
肉竿をブルリと震わせ、黄ばんだザーメンをまき散らす。とろろ芋のようなこってり白濁液を打ち上がった。
舌を出し喘ぐ姿は淫乱そのもので、イカ臭い精液が境内を汚していく。
「ふ、く、はあ、はあ……はあ……は、早く止まれ……うう、ううう……」

「たくさん出たね。普通の女じゃ中々こうはいかないんだけど、さすがボクの雌奴隷だよ」
「くっ、うぅ……なんて醜態を……」
悔しげに目を伏せるサクラヒメ。鈴口から漏れ出る精液は一分かけてようやく治まった。常人ではありえない精液量である。
そして、屈辱に耐える表情とは裏腹に、初めての射精快感は身体へ心へ確実に刻まれる。
（射精とはこれほどまでに気持ちいいものだったのか……まるで魂が昇天するようで……お父さまや良平も同じことをしていたのだろうか……い、いや何を考えているんだわたしは！　しっかりしろ！　鬼蛙の思う壺だぞ！）
すんでのところで正気を取り戻し、心に活を入れる。呼吸を整え精神を立て直す。
「これで終わりか？　やはり大したことはなかったな」
「へぇ、言ってくれるね」
鬼蛙は次の調教に頭を巡らせる。ようやく手に入れた玩具でどのように遊ぶか額に浮き出た顔が喜色に歪み――
「はぁ、つまらないな」
「つまらないだと⁉　人をあれだけ弄んでおいて……！」
「だって、このままじゃフェアじゃないでしょ？　人質を取って一方的に嬲（なぶ）るなんてイジ

メみたいだし、ボクそういうのって嫌いなんだよね」
「しらじらしいことを……正々堂々と戦う度胸など貴様にはないだろう。これで八大鬼とは情けない限りだがな」
挑発し、状況の打開に頭を働かせる。
（言葉の意図はわからないが、鬼蛙は気分屋なオニゲミだ。従順なわたしに早くも飽きがきているのなら、こちらにも勝機はある！）
最悪の状況でもけっして逆転をあきらめない。そして、意外なほど早く好機は訪れた。
「そこまで言うのならゲームをしようよサクラヒメ。キミが勝ったら良平くんに手は出さない。潔く戦ってあげるよ」
「……ゲームだと？　一体何を企んでいる」
「心から屈服してもらいたいだけさ。さっきも言ったでしょ？　一方的なのは好きじゃないって。キミにもチャンスをあげるよ」
「その言葉に嘘はないな？」
「もちろん、今まで一度でもボクが嘘をついたことがあったかな？」
ニヤついた顔面からは並々ならぬ自信がうかがえ、油断しているようにしか思えなかった。

（オニグミの言葉など普通は信用できないが、鬼蛙は一度言ったことを反故にするタイプではない。八大鬼としてのプライドが許さないだろうからな。いや、元より今のわたしに選択肢などない！）

サクラヒメは研ぎ澄まされた刃のように覚悟を口にした。

「わかった、そのゲーム受けて立つ。装刃戦姫の強さ、その身に刻むがいい」

「いい返事だね。でも、キミが負けた場合はどうするの？　罰ゲームでもやってくれるのかな？」

「ああ、罰ゲームでもなんでもやってやる。さっさと始めろ鬼蛙」

「オッケー。その言葉忘れないでね」

サクラヒメと鬼蛙は拝殿へ進む。

「ゲームはこの賽銭箱でやってもらうよ」

「こ、これは……？」

困惑の声を漏らす黒髪乙女。目の前にある賽銭箱はどこにでもある普通の品ではなかった。ハシゴ状の部分にはバラエティー番組で見るようなパネルがはめこまれ、正面中央、ちょうど股間が当たる部分には黒い穴がぽっかりと空いていたのだ。

呪力による変異が起こっていることは明白であった。

「ルールを説明するよ。賽銭箱の穴にはオナホールが入っている」
「おなほーる？」
「オマンコを模した玩具のことだよ。そこにチンポを突っ込んで、奥にあるボタンを押す。一回押すごとにパネルに回数が表示される」
「神聖な神社で罰当たりな……それに、女性器の玩具など悪趣味が過ぎる！」
「射精せずに二十回ボタンを押すことができたらキミの勝ち。途中で我慢できず射精しちゃったらボクの勝ち。簡単でしょ？」
「……ッ、たった二十回だけでいいんだな？　ルールはそれだけか？」
「それだけだよ。それにゲームがスタートしたらキミには指一本触れないから安心して」
「承知した。あとで後悔するなよ」
サクラヒメは毅然とした態度で賽銭箱の前に立つ。頭の後ろで手を組み、ガニ股ポーズで腰を突き出した。今さっき射精したばかりのフタナリ肉竿は鬼蛙の指で勃起させられ、物干し竿のように硬くいきり立っていた。
（必ず勝利してみせる。良平、待っていてくれ）
慎重に穴へペニスを近づけ、そろりそろりと差し入れる。初めてのオナホール体験だ。
「ふ、あ、やあぁあああ！　く、これは……！」

ヒダとローションの絡みつきに恥ずかしい声を上げてしまう美少女戦姫。
穴の中は人肌に温められ、肉竿をヌルヌルと抱きかかえる。
「ゾクゾクするでしょ？　これと同じものがキミの身体にもあるんだよ」
「破廉恥なことを……くっ、んん！　さ、最初は驚いたがどうということはない。うく……！　生暖かいだけだ……ゆっくり動けば……んっ、平気なはずだ……んんん……」
亀頭が奥に届きボタン押す。これで一回目のカウントだ。しかしパネルに反応はなく、表示はゼロのままである。
「おい、どうなっている！　まさか騙したのか！」
「ごめんごめん。ボタンは淫語を言いながらじゃないと反応しないんだ。なにかしゃべりながら押してみて」
「い、淫語⁉　そんなものわたしが知るわけないだろう！　ふざけたことを言うな！」
「まあ、それもそうだね。今から覚えてもらうわけにもいかないし、台本でも読んでもらうかな。こういう時のために前から準備しておいたんだ」
「台本だと……なっ！　なんだこれは⁉」
目の前に広げられたページを見て、サクラヒメは驚愕（きょうがく）する。台本に書かれていた内容、それは淫乱で下品で変態的としか表現できないものだった。

性の知識に疎い彼女でも数行で赤面してしまうほどに。
「こっ、こここここ、こんなことを言えるものか！」
「できないならゲームオーバーだよ？　せっかくチャンスをあげたのに残念だなー」
「本当にクズだな貴様……くっ、うう、うう……約束は必ず守れよ！」
どれほど理不尽な要求でも飲むしかなく、仇敵の淫語台本に目を走らせる。黒髪乙女は羞恥の毒に苛まれながら一行目を口にした。
「い、今からオナホ童貞サクラヒメがセンズリ実況をする！　どうかご静聴をお願いしたい！」
「それは興味があるね。どんな実況をしてくれるのかな？」
「ま、まず始めに奥まで勃起おチンポを突っ込む……ぐっ、ふうぅうぅぅう！」
言葉と腰振りに反応し、パネルに一という数字が表示される。あとは同じことを十九回やるだけだ。
「二回目……少しおチンポを引いて空気を抜く……こ、こうすることでホールの吸い付きがよくなる……んうう……！」
動きに反応しオナホールが自動で空気を排出しようとする。八大鬼が用意した一品だけあって市販の物とは比べ物にならないほど高性能だ。

ブビュッ、バビュッという音と一緒にたまっていた空気が抜け出していく。
「ふ、あぁ……三回目……！　こ、これでおチンポとオナホがピッチリ合体……お、おマンコ構造をより感じられるようになる……ひぐッ!?　はう！　ふあああぁあああああッ!?」
中が真空に近くなったことで、挿入時の何倍もの快美がフタナリ肉竿を襲う。
イボやヒダが絡みつき、腰を振るごとに射精衝動が高まっていく。
「よ、四回目……！　ふぁ、あ、あひぃぃ！　こ、ここからが真のオナホコキとなる……ひ、ヒダの感触に敬意を払いローションのヌメヌメに感謝しながらセンズリをこく！　ほおっ！　おおっ！　おおぉおぉおおおぉん！」
恥ずかしいセリフを叫びながら抽送のペースを上げていく。台本の言いなりになりながらフタナリ快美に溺れていく。
「五回目ぇ……ほぉっ！　んおおっ！　おひィィイイッ！　す、吸い付きすごい……ローション気持ちいい……！　おおォおおぉおおッ！」
「クフフ、すごい喘ぎ声だね。気に入ってもらえてよかったよ」
「だ、黙れ……六回目ぇ……んぐっ！　あぐっ！　お、オナホに向かって猿みたいにおチンポズリをする！　七回目……き、気合いを入れて子宮ゾーンまでしっかり挿入する…

…ぐく！　はうあぁぁあぁぁあっ！　ボタンをチン押しする……チンポでタッチするううう！」

正義の装刃戦姫ははしたない水音を立て、連続でカウントを刻んでいく。変態オナニーに恥じらっている余裕はまったくない。

（とにかく早く終わらせないと……！　我慢できなくなってしまうぅ……！）

精通したばかりの包茎肉竿に疑似膣孔の辱悦が心地よく染み込んでいく。腰を前後させるたびに視界が点滅する。

「十回……お、おチンポトロトロになるぅ……十一回……き、金玉から変態……ザーメンこみ上げてくるう……くふああ、アアアアァァアアアッ！」

「まったくひどいオナニーだね。オニグミのボクでも引いてしまうよ。あー気持ち悪い」

「んむうううぅぅっ！　じゅ、十二回ぃ……み、みっともないセンズリで申し訳ない……！　でもやめられないんだ……わたしはド下品チンポコキが大好きなフタナリ雌奴隷だから……くううぅっ！　チンポいいいいいい！」

ペニスが肉裂に締め付けられるたびにフタナリ欲望が荒れ狂う。海綿体が膨らみ陰茎のすべてを硬く、硬く膨張させる。皮を剥かれた包茎亀頭はヒダをかき分け、淫猥に蠢動（しゅんどう）する。

背筋に快美電流が流れて止まらない。

「チンポ、チンポ、チンポっほおぉおおおッ！　じゅ、十四回……よ、よく見てくれ……これがわたしのオナホコキなんだ♥　玩具相手にへ～こへこ腰振る情けないオナニーなんだぁ♥　ほぉっ♥　んひ♥　くひ♥　ひいいぃぃ～～ん♥」

言葉に甘いものが混じり、鈴口が解放を求めてヒクつく。

しかし、正義のヒロインはまだ屈してはいない。最後の気力で射精衝動に耐える。亡き両親や恋人を想い、淫悦に抵抗する。

（負けない負けないわたしは負けない！　射精なんかしてたまるものか！　絶対に我慢してみせる！）

そして、残り三回。

フタナリ肉竿を最大に怒張させながら、黒髪戦姫は死力を尽くす。気の狂うような射精欲求に理性はもう限界だ。

「んっ♥　んんっ♥　シコシコ止まらん……♥　おチンポ感じ過ぎる……っ♥　こ、これで十八回めぇ♥　あ、あと二回……んくあぁあ……♥　ふっ、わ、わたしの勝ちのようだな鬼蛙！」

「さすがはボクの雌奴隷。カッコイイよサクラヒメ。でも……ここから我慢できるかな？」

「なっ、なに!?」
鬼蛙は小銭を取り出すと賽銭箱に投げ入れた。小銭に込められた呪力はオナホールに伝わり、隠された機能を引き出す。快楽振動、バイブレーション機能を。疑似膣内がゆっくりと震え出していく。
「ヒッ、ひぎぃ!? そ、そんなの嘘だ……」
バイブの振動が最大限になった時、今までの比にならない辱悦が童貞チンポを直撃した。亀頭や竿が一気に耐久限界を迎え、たまらず叫ぶ射精直前のフタナリ乙女。
ヴイイイィィィン♥ ブイイイィィン♥
「ぐっ、ぐっひいいいいい♥ ひうっ♥ あひっ♥ ひ、卑怯だぞ鬼蛙♥ へおおぉおぉおお♥」
「言った通りキミには指一本触れてないよ。キミにはね。賽銭箱の仕掛けに気づかない方が悪いんじゃないかな?」
「ふ、くううぅ……♥ じゅ、じゅ、じゅ、十九回目……♥ あ、あと一回だけぇ♥ が、我慢すれば……♥ おチンポ♥ おチンポ♥ ちんぽぉ♥」
最後の力で淫語を吐き出し、腰を振る。虚ろな目で台本の文字を追う。
「も、もう少し……♥ もう少しでおチンポタッチできるっ♥ ボタンを押せば……んく

うううぅ♥」

だが、生えたばかりの敏感包茎ペニスは激しい刺激に耐えられない。鈴口から透明な雄汁がこぼれ出し、肉竿が喜悦に戦慄く。

振動オナホールはバイブ音を轟かせ、ヒダとローションが亀頭を絶頂へと導いていく。

「だ、だめだめだめダメ！　漏れちゃダメだ！　わたしは負けるわけには……あ、あああああッ！」

そして、無慈悲にも決壊の時が訪れた。射精管から汚濁が吐き出される。

ブビュ♥　ブビュビュ♥　ドブッ♥　ドッビュルルルウウウ♥　ゴビュルルウウウ～～♥

「あああ♥　でっ、出るっ♥　出るっ♥　出てしまうっ♥　くううううぅうぅぅうううん♥」

ドスケベ爆音を鳴らしながらフタナリ肉竿がザーメンを発射した。十九回分の快楽が一斉に解放され、サクラヒメは絶頂に達する。

「ふぐっ、ああ……ふあああぁ……♥」

「ククク、ボクの勝ちだね」

「ひぁ、ああ……振動とまれ……おチンポキツいい……♥」

穴いっぱいに精液を注ぎ込み、虚空を見つめる黒髪戦姫。強烈な解放感で普通の人間ならば立っていることもできないだろう。

射精が終わるとようやくオナホールが振動を停止した。

「んんくっ、うぐうう……と、止まった……はああ……」

射精の法悦が股間を支配していく。

サクラヒメは怒りに震えながら、仇敵に食ってかかった。

「この卑怯者！　この勝負無効だ！　振動なんてわかるわけがないだろう！」

「あれだけ射精したばかりなのにまだやるつもりなの？　まったく、キミの強情には恐れ入るよ」

「当然！　わたしはまだ負けていない！」

鼻っ柱の強さはいまだ健在。たとえフタナリにされても心の刃に曇りはない。

「ふーん、あっそう」

鬼蛙はその反応を待っていたかのように口角を上げると、賽銭箱に追加の小銭を投げ入れた。

「⁉　ま、まさかそれは……！」

「負けを認めてもらおうかな。クフフ」

再びバイブレーションが開始される。
ヴヴヴ！　ヴヴヴヴ！　ブイイィィイン！
「ひぎいいいいいいいい！　や、やめ……はぐっ！　ぎいいいいいいいいい！」
まだチンポを咥え込んだままのオナホールが激しく振動する。先ほどの勢いが弱なら、今は強といったところか。より激しく苛烈に、上下左右に肉竿を責めつける。
「へほおおぉおおお♥　ど、どこまでわたしを辱めれば……♥　んむうううぅぅう♥」
「雌奴隷のクセに生意気な態度を取るからだよ。ボクだってホントは心が痛いんだよ？」
「し、痴れ言をっ！　こんなもの抜いてやる！」
腰を引いて勃起させられた肉竿を引き抜こうとする。
しかし――
「ぬ、抜けない⁉　おチンポが抜けないッ⁉　おっ♥　ふおお♥　オオオオオオン♥」
「負けを認めて射精しないと外れないよ。ほら、認めるんだサクラヒメ」
「いやだっ！　だれが貴様なんかに……！」
必死に腰を振り、振動淫悦から逃れようとする。だが、オナホールはピッチリと陰茎に吸い付き、とても外れそうにない。
逆に引き抜こうとする姿がオナニーに没頭しているようだ。

「うぐっ♥　うぐっ♥　むうぐうぅうぅうぅう♥　抜けろ抜けろ抜けろおおぉ♥　ひ♥　ひぁぁあああああああん♥」
「ほら、もう台本はないよ？　あとは自分で考えて淫語をしゃべらないと」
「また卑猥なことを……！　わたしは負け……ないっ！　淫語など言うものか！」
黒髪乙女は切り刻まれるような葛藤に襲われる。鬼蛙の言葉に従えば尊厳を地の底まで貶めるようなセリフを吐かなければならない。
しかも、今度は自らの意志でだ。
（言えばもっと気持ちよくなれる……恥ずかしい思いができる……でも……うぅ、こ、股間が疼く）
賽銭箱膣孔が刺激を与える。
肉幹にヒダが絡みつき、ローションが包茎亀頭を舐め上げる。名器の締め付けに精液通路が確保されてしまう。
（おチンポキツい……我慢しないといけないのに……悔しいのにみっともないのに感じてしまう……！　あの快感が忘れられない……！　射精したい！　射精したい！　射精したくてたまらない！）
吐精の悦びを覚えてしまった勃起乙女は雄の快美を求めてしまう。装刃戦姫としてのプ

ライドがフタナリ衝動に塗りつぶされていく。

「だ、ダメだ……また出る♥　でるでるでるでる♥　漏れてしまうううぅうううぅう〜〜♥」

ピンク亀頭がヒクつき、金玉から白い欲望がせり上がる。限界を迎えたフタナリ肉竿は淫孔に屈した。

ブビュ♥　ビュビュビュ♥　ドッビュルルルウウウゥゥゥ♥　ゴプププウウゥゥ〜〜♥

「い、イクイクイクいっくううう♥　おチンポイク♥　おチンポイク♥　ザーメン吐き出す♥　ほおぉぉん♥　こ、告白する♥　わたしはオナホで童貞を捨てる情けないフタナリマゾなんだ♥　し、しかも賽銭箱相手に腰振る最低の罰当たり戦姫だ♥　神聖な神社でザーメン大放出してしまうドスケベで申し訳ない♥　どうしようもない迷惑痴女で申し訳ない♥　お賽銭代わりにチンポ汁を注ぎ込んで申し訳ない♥　神様、我慢のできない早漏フタナリ雌奴隷で申し訳ないぃ♥　ん、んひいいぃぃぃ♥」

一生懸命ひねり出した淫語を叫び、絶頂する半陰陽のマゾ戦姫。強烈な白濁奔流（ほんりゅう）で賽銭の投入口から精液が飛び出し、石床や細面を汚した。

アヘ顔でザーメンを吐き出す姿に刃のような鋭さはまったくなく、すっかり射精の快感に取り憑かれているようである。

鬼蛙はひとしきり痴態を見物すると、
「やっぱりボクの勝ちだったね。キミはフタナリチンポに抗えないのさ」
「はぁ……♥　はぁあ……♥　ふぁあ……♥」
「今回はこれで退散してあげるよ。罰ゲームを期待していてね。ククク、クハハハハ！」
高笑いを上げ、闇へと姿を消した。神社を覆っていた封鎖結界が解除され、賽銭箱も元に戻っていく。
「ま、待て鬼蛙……わたしはまだ……」
ようやくフタナリ肉竿を引き抜き、その場で倒れ込む黒髪乙女。昇天するほどの射精快楽で足が動かない。
「まだ負けていない……！」
恥辱に身を焼かれても、心までは折れないと誓う。それがフタナリ淫獄の幕開けとも知らずに。

コーヒーにミルクが混ざるように、流華の身体へ呪毒がまわる。自分のうかつさを嘆く暇もなく、敵のマリオネットへと堕ちていく。

「手始めに犬の言葉で話してもらいましょう。ワンワン、キャンキャンと鳴いてもらいますよ」

「ふざけたことを……わ、ワンッ⁉」

己の意思を裏切り、口が反応してしまう。命令に逆らうことができない。

「ワンッ！　ワンッ！　ワンワンッ！　く、口が勝手に……！」

「とてもお似合いですよ。それでこそ負け犬です」

「だ、黙れ……わ、ワンッ！　くうぅぅ～ん」

飼い主に従う雌犬戦姫。鳴き声が止まらない。

「ワンッ！　ワウーン！　バカにするなワンッ！」

「おっと、犬なら芸をしてもらわないと。お座り」

「ワンッ⁉　わうんっ⁉」

大股開きで両手をマットにつける。ハッ、ハッ、とだらしなく舌を垂らす。

「お手」

「わ、ワオンッ⁉」

指を軽く曲げ、霧幻鬼が差し出した手にチョコンと乗せる。完全に忠犬そのものだ。
「っ……わたしを愚弄する気か！」
「愚弄？　この程度で？　お楽しみはこれからですよ」
細い眼にサディスティックな光が灯る。霧幻鬼は豊満な双乳を指で押すと、
「胸を露出してください。犬なら恥ずかしくありませんよね」
「ふ、ふざけ……ワウウウンッ!?」
コスチュームをズラし、Gカップ巨乳をさらけ出す。満月のような乳輪と、ピンク色の乳首が露出する。
「ううっ！　見るなあぁぁあっ！　目を閉じろ！　わうううっ！」
「大きくて下品な乳輪ですね。鬼蛙さまの言った通りです」
「ぐっ、うううぅ……」
倒すべき敵に命令される屈辱。悪夢はまだまだ終わらない。
「次はクロッチをズラしてオマンコを見せましょうか。観客全員から見えるように」
「冗談じゃない！　だれがそんなこと……っあ、クウウゥウッ！」
言い終わる前に流華の手が動き出す。誘うように股間を突き出すと、お尻から手をまわしてクロッチを細く引き絞る。みるみるうちに深紅の花園があらわになる。

「き、キャアアァァッ⁉　ふ、ふざけるなバカ！　ガルルルゥッ！」
オマンコ開帳に頬を染める黒髪ヒロイン。恋人にも見せたことがない秘奥を公開する。
「ほら、金玉を持ち上げてください。オマンコがよーく見えるようにね」
「ワン……うぅ……いやだ……！」
恥辱の熱波で今すぐに身体が発火してしまいそう。フタナリペニスを辱められることはあっても、膣穴を晒すことは初めての体験なのだ。
「もっと開いてください。くぱぁ、ですよ。くぱぁ」
「く、くぱぁ……？」
「女性器を開いて見せるという意味です。膣奥まで丸見えにしなさい」
「わっ、わうぅぅう……ワウッ！　指が勝手に……く、くぱぁなんて……！」
小陰唇を開き、膣穴を奥底まで開帳する。クリトリスの上で陰嚢（いんのう）がプルンと揺れる。
頭のてっぺんからつま先まで被虐の電流が走り、肉竿はフル勃起だ。唇から甘い吐息が漏（ほんろう）れ、羞恥の嵐に翻弄される。
「すげえ！　あれが装刃戦姫のオマンコかよ！」「いい色じゃねえか」「ヒヒ、たまんねえ」
「み、見るな……見るなァ！　わうぅ……最低過ぎる……」
オニグミに女性器を見物される惨めさ。初体験までだれにも見せるはずのない雌芯を暴

かれる屈辱。この世から消え去りたくなるほどの敗北感だ。
「ここからが本番です。もっともっと乱れましょう」
「んっ、くうぅ……わ、わうん……!?」
流華の指先が小陰唇を上から下へなぞる。そろりそろりと敏感な部分をかすめ、観客の視線が一点に注がれていく。
チュク♥　クチュ♥　チュクク♥　クン♥
「んんっ、あっ、わぅ……！　霧幻鬼貴様何をした……んっ！　きゃうんっ！」
「オナニーは好きでしょう？　さあ、快楽に沈んでいきなさい」
「ひっ……ひゃん！　うっ、あっ、わうっ、と、止まれ……わうあんっ！」
しゅりしゅりと乙女の部分を撫で回し、ピンク色の花弁を開花させていく。喉から甘い喘ぎが漏れ出る。
霧幻鬼の命令は女の弱点を知り尽くし、子宮の疼きが治まらない。まぶたの裏に閃光が走り、股間からは透明な雫が垂れ落ちる。
「あうっ、んん、んくうぅぅ……！　わうううっ！　く、クズ男め……あはぁあああっ！」
「これだけ大勢の前で濡れるなんて、聞きしに勝る淫乱ですね。とても処女とは思えません」

「うるさい！　首輪さえなければこんなもの……！　わうっ！　わうううう！」
ナメクジのように這いずる官能に、望まずとも身体をくねらせてしまう。女性器を晒す屈辱と快感で、動悸が速まる。
「あ、ああ、ぅぅ……！　くひゅ、ひうぅ……！」
「直接挿入したわけでもないのに大した乱れっぷりですね。雌奴隷の素質があるんじゃないですか？」
「貴様……っ、ンはあぁああ！　んむ……くあああぁあああああっ！　キュイ～ン！」
フタナリ調教で開発された肉体は、陰茎以外も快感に弱くなっていた。紅色の狭間をなぞるだけで、絶頂の瞬間を予期してしまう。
「こんなことで……くぱぁなんかで感じるものか！　あ、はぁ、ジ……！」
「わざわざ否定するなんて、答えを言っているようなものだと思いますが。それに、もう限界では？」
「はうぁあ……ああ、ち、違う……む、んくむううぅう！　くるううぅううん！」
突き刺さる恥悦でラヴィアから雌蜜がこぼれ出る。呼吸をするたびに淫粘膜が赤味を増し、甘美な昇天を期待する。
いっそのこと処女膜を貫いて欲しいと、不埒な考えが浮かんでしまう。

「ではイッてもらいましょうか。そちらでイクのは久しぶりでしょう？」
「っくうぅうう！　あぐっ！　はうううううぅ!?」
霧幻鬼が首輪に触れると、呪毒の強制力が膣肉を歓喜させる。絶頂という命令さえ履行させる。
何度も擦られた小陰唇が熱っぽく潤み、打ち上げられた魚のように肢体が跳ねる。挿入すらしていないのに、背筋が痺れる。
「や、いあやだぁっ♥　く、くるっ♥　アソコっ♥　くるうぅうううっ♥　わんっ♥　わふんっ♥　わはぁんっ♥」
大股開きで手淫に溺れ、黒髪乙女は肢体でアーチを描きながら、絶頂を迎えた。
「ジッ♥　ンンウウゥウゥウ〜〜〜♥」
「いい表情です。天にも昇る心地でしょう」
「わふん♥　ぅくうぅうううう♥　わふぅぅう♥」
だらしなく舌を垂らしながら痙攣する。それでも、まだ戦う意志はくじけていない。
「な、舐めるなっ！　この程度でわたしを汚したつもりか！」
「おや、射精は堪えましたか。呪毒に抵抗するとは大したものですね」
感じたのは女性器のみで、フタナリ肉竿は反り返ったままだ。黒髪戦姫は驚異的な精神

力で射精アクメを耐える。
残り時間はあと四分。
（精液なんて漏らすものか！　今度こそ……今度こそ耐えきってみせる！）
良平を救うために魂を削る。霧幻鬼はさらなる命令を加えた。尊厳を徹底的に砕いて晒し者にするために。
「お次はチンチンをしてもらいましょうか」
「ぐぅ……ウウウ……」
「皆さまにあなたのおチンポをお見せするんですよ。股をしっかりと開きなさい」
「あっ、ひゃ、あああっ！」
M字開脚で両手を胸の横に掲げる、雌犬のワンワンポーズを取らされてしまう装刃ヒロイン。
ゴムカバーと包皮で二重にくるまれた勃起チンポを衆目に晒す。フタナリ改造された肉体を改めて意識させられ、誘うように肢体をくねらせる。
「つ、次から次へと下品なことを！　先に言っておくが射精するつもりはない！　何があってもこれ以上出すものか！」
「なるほど。では、こちらはどうでしょうか？」

「なに……？　ワッ、わひんっ♥　これは……ま、まさか貴様！　ワフウウンッ！」
流華が感じた違和感、それは尿意であった。膀胱がドクドクと波打ち、オシッコが尿管を上がってくる気配がする。
すぐにトイレに行かなければ、漏らしてしまいそうだ。
「ここでオシッコをお漏らししてもらいましょうか。負け犬なんだから当然ですよね」
「ま、待て！　こ……ここで漏らすなんて、そ、そそ、そんな無様な真似ができるか！　わうううッ！　グルウウッ！」
「何を言おうと選択権は私にありますから。もう限界のはずですよ」
「んふぁ♥　やっ、いやっ……だぁ！」
霧幻鬼はゴムカバーに穴を開け、放尿の態勢を整える。ムワッ、とした臭気と共に桜色の鈴口が顔を覗かせる。
「んっくっ……♥　や、待ってくれ！　と、トイレ！　トイレに行かせてくれ！」
「ダメです。ここで漏らしなさい」
「う、うぐぅ……！　お願いだから！」
荒れ狂う尿意へ抵抗しようにも、太腿を擦り合わせることさえできない。もどかしい感覚は尿道口のすぐそこまで迫っている。

「頼むからトイレに……ひぐっ！　ぐううぅ！　クウゥ〜ン！　はうぐうううぅう！」
「さあ遠慮なく」
「わ、や、わひいいいいいいいんっ！」
泣きそうな顔で懇願する黒髪ヒロイン。排泄行為を他人に見られるなどあってはならない。そんなことをする奴は変態だ。
「む、無理……本当に無理なんだ！　オシッコ漏らしなんてできない……！」
「駄々ばかりこねないで欲しいですね。鬼蛙さまもお待ちしているんですから」
「お、鬼蛙……」
観客席を見ると、鬼蛙がギラついた瞳でこちらを見ていた。他のオニグミも同様だ。装刃戦姫の放尿を心待ちにしている。
（あんな下衆に放尿姿を……で、でももう耐えられない！　父さま、母さま申し訳ありません……）
仇敵にお漏らしを見物される極大恥辱。少しでも決壊を遅らせようと、肛門を引き締める。だがそれも無駄な抵抗。
パチンと指を打ち鳴らし、霧幻鬼が首輪に合図を送る。呪毒がズルリと股間を浸食する。
「あ、ああ、あああああッ！」

それをきっかけに、黒髪戦姫の膀胱は決壊した。薄く黄色がかった液体が漏れ出てくる。

チョロ♥　チョロロッ♥　ジョボボボボ♥　ジョロロ♥　ジョボボオオオォオオオオ♥

「ひゃあっ♥　あっ♥　あっ♥　で……でるうウゥゥ♥　オシッコ漏れる♥　漏らしてしまうう♥　シーシーしてしまうぅうううう♥」

リングでの放屁に続き、放尿までしてしまうお漏らし美少女。濃密なアンモニア臭に、近くにいたオニグミが再び顔をしかめた。

「ああ、あああ……♥　やあぁぁ♥」

オシッコはたっぷりと排泄され、マットはもうビショビショだ。チンチンポーズで小便溜まりを見つめ、屈辱に震える流華に、霧幻鬼は言葉のナイフを突きつける。

「おやおや、たくさん漏らしてしまいましたね。恥ずかしくないんですか？」

「う、うう……わうん……」

「答えてください。オシッコを我慢できなかったんですよね？　恥ずかしくないんですか？」

「は、恥ずかしい……漏らしてしまって申し訳ないワン……」

「悪いと思っているなら謝罪してもらいましょうか。今すぐに」

「ひ、ひっく……く、くぅ……ご、ごめんなさい……わたしはオシッコを漏らしましたワ

ン。大切なリングを雌犬のオシッコ臭くしてごめんなさいワン」
「もっと誠意を込めて」
涙ぐみながらお漏らしを謝る。観客席から飛ぶ野次が心を追い詰める。
「きったねえな」「マジで雌犬かよ」「ションベンはトイレでしろっつーの」
「わううっ♥　しょ、ションベンッ♥　ションベンだっ♥　ワンワンポーズでションベン漏らしてすまないワン♥　わたしはションベンも我慢できない最低の尿道ガバガバ女なんだワンッ♥」
「それから？」
「ションベンしながらチンポも勃起させてしまう変態雌犬なんだワン♥　オニグミのお客さま♥　わたしのションベンが大変失礼をしましたワン♥　くっ、うううぅ……情けない……」
しゃくりあげながらお漏らし謝罪するオシッコ戦姫。残り時間は二分。霧幻鬼はトドメの調教を開始する。
「最後は土愚鬼にならってプロレスらしく決めてあげましょう。協力してもらいますよサクラヒメ」
「わひぃん！　か、身体がまた……！」

流華はその場で仰向けになると、両足を頭の横にくっつけさせられる。霧幻鬼はそれを自分の腹の上に乗せ、抱きかかえ、脚を絡める。相手の股関節をギリギリまで開脚させる恥ずかし固め、まんぐり返しの体勢だ。

「ぐっ、くぎイイィィィィ！　く、苦しいっ！」

「もう十分我慢したでしょう。楽にしてあげますよ」

「ワクぅうう！　わううん！　なんの話だ⁉」

フタナリチンポに唇が届くほどの前屈体勢を取らされる。再びの羞恥ポーズに身を震わせる装刃ヒロインだが、思考する間もなく未知の感覚に狂わされていく。

アナルに挿入されていた尻尾バイブが振動を開始したのである。一擦りごとに脳が焼き切れるような快美電流が全身を痺れさせる。学園では絶対に出せない下品声で哭いてしまうまんぐり乙女。

ヴヴヴヴ♥　ヴイィィン♥　ヴィイィィン♥

「あひぃいいぃいいいぃ♥　いや……いやあっ♥　お尻くる♥　き、気持ちいいのが流れこんでくるうううぅぅうう♥」

「どうですか前立腺を責められる気分は？　ぞくぞくするでしょう」

「する♥　するワン♥　頭おかしくなるぅうううっ♥　ひぃぃぃっ♥　こんなの覚え

たらヘンになっちゃうワン♥　お尻オナニー覚えて変態バカ戦姫になるワウゥウゥウウン♥」

「気に入ってもらえてなによりですよ。負け犬ヒロインさん」

「あっぁあぁぁぁぁ♥　気に入ってないワン♥　おほっ♥　おほっ♥　おほっぉおぉぉおおあぁぁ♥　も……もぅやめてくれぇぇぇぇ♥　ひぅぅうぅぅぅう♥　わごぉおぉぉおおお♥」

数分前までの強気な態度はどこへやら。

性感帯を絞り上げられアヘ顔を晒す。普段の威厳どころか人間としての誇りも残らず捨て去り嬌声を響かせる。

霧幻鬼はフリフリと揺れる金玉に触れ、射精準備を整えた。残り時間はあと一分。

「な……あっ♥　金玉っ♥　金玉おかしいっ♥　玉袋さわるなぁ♥」

「揉みごたえのあるよい金玉です。このままお顔にぶっかけてしまいましょうか」

「かっ、顔に⁉　ひぐぅぅぅぅぅ♥　もう許して♥　許して霧幻鬼さまぁっ♥　自分で顔面射精なんて無理だワン♥　人間のすることじゃないワン！　わぐぅぅう♥」

快楽の連続で頭がまわっていなかったが、このまま射精すれば、顔にザーメンがかかるのは必然。自分で自分の白濁液を浴びてしまう。

「負け犬のあなたにピッタリですね。人間にバイバイしましょう。サクラヒメ」
「ぁっ♥　んっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁっ♥　ぁんっ♥　いやぁぁぁぁぁぁ♥　金玉プニプニするな♥　顔面射精なんてしないワン♥　わっ、わたしは耐える♥　耐えるワウウン♥」
最後の気力を振り絞る黒髪乙女。だが、菊門の震えは激しさを増し、射精衝動がこみ上げてくる。
「おほおおっ♥　ケツ穴こすられてイキそうぅう♥　い、いや……ダメだ！　ほ……誇り高い装刃戦姫は絶対にイッたりなんかしないワン♥　ワン♥　ワン♥」
包茎チンポを天狗の鼻のように勃起させ、尿道責めで感じてしまう。恥ずかし固めがさらに恥辱を煽り、ブルンッブルンッと、Gカップ巨乳を乱高下させる。
「たっ……耐えて♥　耐えて♥　耐えて♥　耐えるんだ♥　もう少しのはずなんだ♥」
「ゲヘヘ、もう無理だな」「オラッ、早く出せよ変態女」「ザーメンぶちまけちまえ！」
「ワウウゥウン♥　う、うるひゃい♥　ザーメンなんて出さない♥　ぴゅっぴゅっなんてしないからな♥　本当だぞ♥　キュウウゥ〜ン♥」
必死に尿道を引き締めるも、もはや時間の問題。制限時間よりも射精快楽の方が早い。
陰嚢マッサージと肛門バイブで、いやがおうにも絶頂へ歩かされる。

「りょ、良平！　必ず助けるからぁ！　ほお♥　おお♥　ワウウゥウン♥　ワホオゾ♥」
最後に浮かんだのは恋人の笑顔。オニグミとの戦いでボロボロになった自分を優しく包み込んでくれる笑顔だった。
「ち、チンポ耐えるワン♥　チンポ我慢するワン♥　チンポ射精しないワン♥　チンポチンポチンポチンポぉ♥　チンポイッたりなんかしないワン♥」
しかし、その想いも動物的な欲望に塗りつぶされる。思考が虹色に点滅し、発狂しそうなほどの快美が股間に集中する。
「ワ、ああ♥　ワウウゥウ〜〜ン♥」
ついにフタナリ肉竿は暴発し、粘ついたザーメンが大量に漏れ出した。
ビュク♥　ブビュルルウ♥　ドブブウウウウ♥　ビビュ♥　ドッビュルルウウウゥウウウゥ♥
「ワウウウゥウウン♥　イクイクイクわんわん♥　イグわんわん♥　顔射♥　顔射♥　ザーメン顔射するワン♥　雌玉揉まれながら敗北ザー射♥　ケツ穴バイブでバカ犬ザー射♥　わんわんワオン♥　スケベ雌犬イク♥　ザーメンぶっかけでイク♥　マンコでイッてチンポでアクメ♥　ケダモノみたいにイキまくるワン♥　変態ポコチンから犬汁ひり出すワウウゥウウン♥」

部下に任せるだけでなく、自らの手で準備をしていることがなによりの証拠である。
「技術の進歩ってのには驚かされるねぇ。あたしが生まれた時とは大違いさ」
カメラは三脚で支えられた大型のものが床に四台、小型のものが天井に二台取り付けられている。
昨日までは影も形もなかったディスプレイや機材類も運び込まれ、まるでテレビの中継でも始まるような光景だ。
チェックが終わると妖月はクリスに向き直り、罰ゲームの説明を始める。
「準備はいいかい装刃戦姫サマ？　逃げるんじゃないよ」
「準備も何もこんな格好で逃げられるわけないでしょう。どうせくだらない内容でしょうし、さっさと始めなさい」
「開き直るのもいいけど、お客さまの前ではお行儀よくしておきなよ。今日の罰ゲームはあたしがメインじゃないからねぇ」
「なっ、ではどなたですの⁉　まさか知らない殿方じゃありませんわよね⁉」
「当たらずとも遠からずってとこかねぇ。実際に見てみればいいさ」
見知らぬ男性と性行為を強要され、撮影でもされるのかと恐怖するお嬢さま戦姫。
妖月は呆れた様子で壁際にあるディスプレイのスイッチを入れた。

カメラから映像が転送され、画面に二人の姿が映る。しばらくするとそこに白や黒に赤、様々な色の文字が流れだした。

「これはなんですの？　意味がわからないのですけれど」

「お嬢さまはネット中継も知らないのかい？　簡単に説明すると、この部屋の様子は外部に生中継されている。流れているコメントは視聴しているお客さまが打っているってことさ」

「わたくしの姿が中継されてますのね。うぅっ、最悪ですわ……」

「その通り。裏社会のＶＩＰたちがこの放送を楽しみにしているってわけ。そして罰ゲーム内容は視聴者の皆さまに決めてもらう。今回のあたしはただの司会者さ」

「理解はできましたわ。ホンットに下衆なことばかりよく思いつきますわね！」

「そりゃどうも。じゃあ、さっそく番組を始めようか。まずは自己紹介だよ」

「このっ……わ、わたくしはクリスティーナ・エイミス。岩戸学園に通う生徒ですわ。夜は装刃戦姫コーデリアとして悪魔（デモン）……オニグミを狩っていますの」

「なるほどねぇ。で、股間のそいつはなんなんだい？」

「ふ、フタナリおチンポですわ。妖月さまに生やしてもらいましたの……これからは変態フタナリ女として生きていくつもりですわ。っ……画面の前のあなた覚えてらっしゃい。

必ず見つけ出してギタギタにしてやりますわ！　この変態っ！」
「こらこら、失礼な口をきくんじゃないよ。今から何をするのか説明しな」
「罰ゲームですわ……『淫語射精耐久ゲーム』で負けてしまいましたので。お客さまにわたくしの恥ずかしいところを見てもらいますわ……」
テレビ画面に『フタナリってマジ⁉』『すげー初めて見たw』『金髪お嬢さまサイコー！』『おちんぽクリスちゃんはぁはぁ』などのコメントが流れる。
そのどれもが少女の痴態を嘲笑い、醜悪な表情が目に浮かぶようだ。
今日は若い視聴者が多いのか、早くも興奮を抑えきれないコメントが増える。ドス黒い欲望はまるでコールタールのようだ。
「本日の雌奴隷は活きがいいねぇ。お客さまにもきっと楽しんでもらえると思うよ。まずは……アンケートスタート！」
妖月の言葉に反応して、画面の下に選択肢が浮かび上がる。
内容はプレイの種類だ。
【投票。A、三角木馬　B、グリセリン浣腸　C、ムチ打ち　D、蝋燭責め】
シンキングタイムは二分。各アルファベットのコメントが右から左へと流れていく。
それだけでもかなりの人数が参加していることがわかった。一人一票で視聴者がより多

A 三角木馬
B グリセリン浣腸
C ムチ打ち
D 蝋燭責め

く投票したプレイが採用されるのだ。
結果はすぐに発表された。
【結果。A、三角木馬　15％　B、グリセリン浣腸　66％　C、ムチ打ち　12％　D、蝋燭責め　7％】
「なんですのこれ……」
グリセリン浣腸の断然トップに、クリスの美貌が青ざめる。
どれもまともなシチュエーションではないが、浣腸が一位とは思わなかったのだ。
妖月はニヤリと口角を吊り上げ、
「罰ゲームはグリセリン浣腸に決定。さっそく執行するよ」
「待ちなさい！　ま、真面目に言ってますの⁉　あなたたち狂っていますわ！」
「お客さまが決めたんだから仕方ないだろう。あたしにはどうしようもないさ」
「っ、うぅ……絶対にあとで切り刻んでやりますから！」
「ここのところお通じがよくなかったんだろう？　ちょうどいいじゃないか。ねぇ？」
「わたくしのお通じは関係ありませんわ！」
便秘気味でもう一週間も我慢しているのは事実だが、大勢が見ている前で暴露されたいわけがない。

もし漏らせば大量の大便をネットの海に乗せることになってしまい、想像するだけでもおぞましい。

（とにかく我慢。我慢ですわ）

クリスが柔らかな桃尻を突き出すと、小鬼がどこからともなく浣腸器を運んでくる。ガラス製で巨大な注射器のようだ。

中は薄黄色の液体で満たされ、量もたっぷり二リットルはある。

小鬼は肛内壁を舐めて揉み解すと、先端をぷっくりと膨らんだ菊門に差し込み、注入態勢に入る。

ピンク色のアナルに異物が入り込み、「んっ」とか細い声が漏れた。

妖月はすぐに注入を命令せず、カメラに向かって問いかける。

「ここでアンケート。お客さまはどちらが好みかねぇ？」

画面に二択のアンケートが浮かび上がる。

内容は注入の早さだ。

【投票。A、ゆっくり注入する　B、素早く注入する】

「そんなことまで……吐き気がしますわ」

「いいから黙って見ていな」

眉根を吊り上げるクリスを他所に投票は進んでいく。
視聴者の答えは、
【結果。A、ゆっくり注入する　74％　B、素早く注入する　26％】
となった。
「ぐっ、品性下劣にもほどがありますわね」
ナメクジのようにノロノロとした動きでピストンが押され、じわりじわりと浣腸液が注入される。
グリセリンのひんやりとした感触が直腸を苛み、アナルを苦しめる。
内臓に得体の知れない感触が広がり、チリチリと下腹(したばら)が痛み始めた。
チュウ♥　チュウウゥ～♥　チュウチュウ♥
「苦しい……うううぅ！　はううぅ、くうぅ……もっと早くできませんの!?」
「お客さまの意見は絶対さ。それより何かしゃべりなよ。黙りこくっている生放送があるかい」
「勝手なことを……こんな奴らに話すことなんて何もありません！」
「ならあたしが質問してやるよ。あんたが今お浣腸をされているのはどこだい？」
「お……お尻の穴ですわ」

「そんなお上品な言い方じゃダメさ。罰を受けているんだからもっといやらしく、お客さまを愉しませるようにしゃべるんだよ」
「その……あ、アナルですわ」
「それも違うねぇ」
「くっ……うぅ、こ……こう……」
「はっきり言いな！」
司会者の言葉には逆らえない。自分が惨めで情けないがどうにもできない。
花弁のように可憐な唇が恥辱に開かれる。
「こ……肛門ですわっ！　わたくしの汚いクソ穴です！　んんっ、くううぅ……毎日用を足している穴ですわっ！」
「そう、肛門だろう……ん？　なんだ汚い穴だねぇ。ところどころに毛が生えているじゃないか。これはなんて毛なんだい？」
「ケツ毛ですわ！　わたくしのケツ毛です！　お手入れをサボってごめんなさい……クリスは肛門の周りにケツ毛を生やしていますの……んん、お浣腸つらいぃっ！」
「へぇ、お嬢さまはケツ毛も生やしているのかい。とても恥ずかしいねぇ」
「ぅぅ……わたくしはケツ毛女なんですの。あっ、ひぐッ！　ぐうぅぅっ！　金色のケツ

毛生やしているだらしないバカ戦姫なんですの！　お見苦しい尻毛を晒してごめんなさいっ！」

淫語調教の影響もあって、次々と恥ずかしいセリフを口にするケツ毛乙女。

四、五本生えたお尻の毛のことを謝罪させられる。

『げっ、ケツ毛生えてんのかよ』『うわっ、汚ったねぇw』『気持ち悪い。反吐が出るぜ』『オレに剃らせてw』と醜悪なコメントが流れる。

コメントの量が多過ぎて画面が見えづらいほどだ。

（こんなの最低ですわ……んうう、お腹も……ふう、うううううぅっ！）

浣腸液でジクジクとお腹を嬲られ、クリスは身体を悶えさせる。股間のフタナリペニスは完全に勃起し、竿にフリルを着たまま上下に揺れる。

「おやおや、勃起しているのかい？　浣腸で勃起するなんて変態のうえにマゾなんだねぇ」

「ちっ、ちがっ……違いますわ！　わたくしはマゾなんかじゃありません！　言葉に気をつけなさいっ！」

「偉そうな態度を取っていいのかい？　正直に言いなよ変態マゾなんだろう？」

「ちが……うぅ、くうぅ、ああぁ……」

妖月の言葉が毒のように染み込んでいく。抵抗する気力が削られる。

「変態マゾなんだよねぇ？」
「――わたくしは変態マゾです！　お浣腸でチンポフル勃起させる淫乱装刃戦姫ですわ！　ひぅ……んんッ！　お尻気持ちいいですの♥」
「やっぱりねぇ。一人の時はアナルでオナニーしていたんだろう？」
「ええ、そうですわ。中指を突っ込んでアナルオナニーやりまくりでしたの！　おッ♥　うぐん♥　お……おマンコよりアナルが好きなドスケベですの！」
カメラに向かって無理やり笑顔をつくる。
死にたいくらい恥ずかしいのに、身体がゾクゾクと反応してしまう。ペニスの先っぽからカウパーの雫がしたたり落ちた。
『お嬢さま最低じゃん』『さすがにアナルはないわ』『アナルマゾとかバカ過ぎ。終わってんな』『もっとお尻の穴見せて！』と視聴者が好き勝手にコメントを送る。
内臓を焼かれるような苦しみに耐える少女を心配する気配はまったくない。
（わたくしはなんてことを……）
変態性癖を公言させられ屈辱に震えるブロンドの戦姫。目じりにはうっすらと涙が浮かぶが、逃げることもできない。
時間をかけてたっぷりと浣腸を施され、引き締まった下腹部がイカのように膨らむ。キ

ュポンッと浣腸器が引き抜かれ、ようやく注入の苦しみが終わった。
しかし、それはさらなる地獄の始まりにすぎない。
「ぐっ!?　あ、ひぐっ！　あぐうううぅぅぅ〜ッ!?」
下腹から雷鳴のような音が響き、猛烈な勢いで排泄欲求が高まってきたのだ。
肛門を引き締めて決壊に耐えるが、とても長くは持ちそうにない。気を抜けば今すぐにでも大便を漏らしてしまいそうだ。大勢の顔も知らない視聴者の前で。
ギュルル！　グルルル！　グルルルルル！
「すごい音だねぇ。大丈夫かい？」
「だっ、大丈夫なわけないでしょ……早くおトイレに……トイレへ行かせなさい！」
「それはお客さまに聞いてみないとねぇ。はい、アンケート」
【投票。A、トイレに行かせる　B、トイレに行かせない】
すぐに回答が返ってくる。
【結果。A、トイレに行かせる　6％　B、トイレに行かせない　94％】
やはり圧倒的に行かせない人間が多い。
『当然』『知ってた』『ですよねーw』『お前ら信じてたぜ！』『笑うわw』と歓喜のコメントが流れていく。

オニグミのような怪物と繋がっている人間がまともなわけがない。
だが、それでも、クリスは懇願し奇跡を信じるしかなかった。お漏らしなんて絶対にできない。大便を鑑賞されるなんて女性として以前に人として終わってしまう。
「お願いですからトイレへ行かせて！　本当に漏らしてしまいそうですの！」
「なら何か芸でもしてみるかい？　面白い芸を見ればお客さまの気も変わるかもねぇ」
「ホントですの⁉　芸をすればトイレに行かせてくれますのねっ⁉」
必死の形相でカメラに訴えかける。
お腹が死ぬほどつらくて苦しくて、トイレに行けるならどんな可能性にでも賭けてみたいのだ。
願いが通じたのか『いいぜ』『やってみろよ』『チョー、楽しみ』と画面に同意するコメントが大量に流れる。
うなる下腹を押さえながら、意を決してクリスは芸を始めた。
「い、一発芸！　今からお尻で字を書きますわ！　くいっ♥　くいっ♥　くいくいっ♥　くいっ♥　ま、マゾブタと書きましたわ♥　これでいいでしょう⁉」
「いいでしょうって、それだけかい？　やる気がないなら漏らしちまいな」
「うぅ……くいっ♥　くいっ♥　んひうううう♥　ふ、フタナリバカ女ですわ！」

「次は？」
「はう、んん……♥　ああぁん♥　ケツマンコ大好きですわ♥　ふうぅう……♥」
男を誘うように腰を振り、自らを貶める。排泄のためだけに恥ずかしい言葉を選んで書く。
「他にはどんなのがあるんだい？」
「ひゥ、あひうぅぅ……腋臭クサ子です♥」
「イマイチ気合いが足りないね。もっとお客さまに媚びなきゃトイレには行けないよ」
「ぐいっ♥　くいっ♥　ふんぐうぅう♥　淫乱マンコですわ！　も、もういいでしょう⁉　わたくしをトイレに行かせて！　い……行かせてほしいにゃん♥　にゃんにゃん♥雌猫クリスにゃんのお願いだにゃん♥」
手を口元で揃えて片足を上げた、猫のような媚び媚びポーズを取り、上目遣いで機嫌をうかがう。
もうなりふり構ってはいられない。
だが、流れてくるコメントは『思ってたのと違う』『全然ダメ』『やる気あんの？』『バカにしてんのか？』『ねーよw』といったものばかりで、トイレに行かせる気はまったくないようだ。

「そんな……あぐっ、ぐひぁぁぁぁぁぁ！」
クリスはお腹を押さえてうずくまってしまう。恥ずかしくて痛くて涙が出そうだ。
と、そこへ妖月が助け舟を出した。
「やれやれ。だれにでもできる芸じゃお客さまも満足しないさ。あんたしかできない芸をしなきゃ意味ないだろう？」
「わたくしにしか？　……思いつきませんわ」
「股間のイチモツがあるじゃないか。それでオナニーするんだよ。フタナリ女のオナニーなんか滅多に見られるもんじゃないからねぇ。お客さまもそう思っているはずさ」
その言葉に同調し画面には『オナニーしろ』という内容のコメントが溢れかえる。
（なんてこと考えますの。コイツら全員地獄行きですわ！）
人間のために命がけで戦ってきたことがバカらしくなる。こんな奴らだと知っていたら装刃戦姫にならなかったかもしれない。
だが、ごちゃごちゃと迷っている暇はない。痛みのスパンはどんどん短くなる。浣腸戦姫は勃起した肉竿を握り、真剣な眼差しでカメラを見る。
「そ、それではお客さま♥　フタナリ変態女クリスのおチンポオナニーショーをごらんくださいませ♥　はい、シ～コシコ♥　シ～コシコ♥　おチンチンしこしこ～♥　うっふ～

ん♥」
卑猥なセリフを口ずさみ肉竿を擦っていく。白魚のような指で円をつくり、根元から亀頭の先端へせわしなく動かす。
片方の手は後ろからお尻をくぐって金玉を掴み、モミモミと玉袋の間で指をくねらせる。クチュックチュッと淫らな音をマイクが拾い、先走り汁を視聴者にお届けする。
「チ〜ンポッ♥　チ〜ンポッ♥　チ・ン・ポ♥　シコシコ♥　シコシコ♥　シ〜コシコ♥」
「あはは！　まさか本当にやるとは思わなかったよ。一体だれをオカズにしているんだい？」
「お……お客さまです♥　お客さまに見られている姿を想像してますの♥　あんっ♥　んんっ♥　露出マゾクリスは人にオナニー鑑賞されて感じてしまいますの♥　ンッ♥　それシ〜コシコ♥」
「もっとよく見せてあげなよ。それに笑顔でね」
「あはっ♥　ひゃいい♥　え、笑顔でオナニーしますわ♥　ニコニコ♥　ニコニコ♥　笑顔でおチンポしこしこっ♥　あっは〜ん♥」
淫蕩な笑顔を浮かべセンズリする薔薇の戦姫。
『いいぞ、いいぞ』『マジでオナニーしてやんのw』『フタナリオナニーきたー！』『もっ

と腰振れよ』と反応も悪くない。

大人数に見られている快感がさらに手の動きを加速させ、感度が何倍にも何十倍にも膨れ上がる。

自慰の経験はあっても、ここまで昂るのは初めての経験だ。気持ちよくて心地よくて、生えたばかりのフタナリチンポはすぐに絶頂を迎えた。

カメラに向かって白濁液を放出する。

ブビュル♥　ブブビュル♥　ビュクウウウウウウウ〜〜ッ♥　ドッピュン♥

「お……おほおぉぉぉぉぉ♥　イグッ♥　イグッ♥　イグうぅぅうぅぅぅぅ♥　画面の前のお客さま♥　わたくしのイキ姿をよく見て見てぇ♥　ほぉ♥　ザーメンぶりぶり出ちゃってますのおぉおおおおお♥　ひぐうぅうぅうぅうぅうぅう♥」

白目を剥きながらイキまくるフタナリ戦姫。

射精を見られることが恥ずかしいことだとわからない。頭の中は便意で埋め尽くされ、トイレに行くことしか考えられない。

妖月が再度アンケートを取り、クリスは祈るように画面を見つめる。

【結果。A、トイレに行かせる　37％　B、トイレに行かせない　63％】

「んうぅ!?　やぁ、あぁぁあああ……！」

もう何度限界を迎えたかわからない腹部を押さえながら、クリスは最後のお願いをする。
これでトイレに行けなければここまでの恥辱も努力も水の泡だ。
「もう一度チャレンジさせて……くうう！　お腹が裂けそうなんですの！」
「今のでダメならもう無理さ。それより、いい加減正直に言ったらどうなんだい？」
「なんの話を……隠し事なんてしていませんわよ」
「いいや『トイレトイレ』ってそればかりじゃないか。もっと具体的に何がしたいか言うんだよ」
「‼　で、でも……それは……」
妖月の意図は理解できる。視聴者も同じことを考えているのだろう。
だが、それを口に出したらすべてが終わってしまう。乙女が人前で絶対に言ってはいけない言葉だ。
（どこまで品性が腐っていますの。で、でもわたくしにはそれしか……）
悩んだ末にクリスは、恥辱の決断をする。
「し……したいですわ……」
「ん～？　何をだい？」
「お……あの、大きい方を」

「舐めてるのかいあんた。大きい方なんて言い方じゃわからないねぇ」
「そ、その……お……オシッコじゃない方ですわ……あの……」
「だーかーらー、具体的に言ってくれないと伝わらないんだよ。そうだろう？」
視聴者も同意する。
口から直接、羞恥セリフを言わせたいのだ。
「くっ、ぐぅ……そ、その。あの……う……っち……ですわ……」
「もっと大きい声で。聞こえないねぇ」
「ん……ち……ですわ……」
「お客さまに聞こえるように」
「お、ぐぅうぅぅ！　ぅ……ン、ち……ですわ……くぅぅ……こんなのひど過ぎます！」
「もっとはっきりと」
執拗に嬲る四尾の妖狐。クリスの精神力がみるみるうちに削られていく。痛くて痛くてお腹に溜まったモノを出したくてたまらない。
（し、仕方ありませんわ。もう無理なんですの……）
忍耐力が限界に達し、屈服瞬間が訪れた。
「ぐぅ……う、う、う、ウンチですわ！」

「あれ？　今ウンチって言ったのかい、装刃戦姫サマ？」
「そうですわ！　ウンチ！　ウンチ！　ウンチですわ！　ウンチがしたいですの！　お客さま、わたくしにウンチをさせてください！」
「まだ気取ってるねぇ。ウンコだろう？　ウンコがしたいって言いなよ」
「そ、そうですわね♥　ウンコですわ♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ぶりぶりウンコがしたいですわ♥　きったないウンコがしたいのです♥　ぐ……ぐうううぅッ♥」
　声を張り上げ大便の名称を叫ぶ。惨めでみっともないはずなのに、マゾヒズムが疼いてしまう。
「もっとだよ。お客さまに誠意が伝わるようにねぇ」
「ウンコをさせてくださいませ♥　便秘でぎっしり大便が詰まったお腹から排泄させて♥　ケツ毛の生えた糞穴からウンコを出したいんですの♥　茶色くて立派なウンコをしますから♥　ブリブリさせてぇ♥　ブリブリッ♥　ブリブリッ♥」
「それだけかい？」
「ぶりぶりウンコ♥　ぶりぶりウンコ♥　最低下痢グソ♥　淫乱マゾ大便♥　肛門からくっさいウンコをひり出したいですの♥　くっさいウンコをいっぱいっ♥　いっぱい♥　んくううぅうう♥」

「もっとだよ。もっと言いな」

「一本糞♥　ゲリゲリ糞♥　コロコロ鹿糞♥　いっぱいウンコしますから♥　汚い激臭ウンコがしたくてたまりませんのおおぉお♥　お客さま、どうかわたくしにウンコをさせてください♥　ウンコ♥　ウンコ♥　ウンコおおぉおぉおぉ〜♥」

汚物の名前を連呼する最低最悪マゾ雌戦姫。

淫猥に蕩けきった顔に、高貴なプライドなど一欠片もない。あるのは動物的な排泄欲求だけだ。

Eカップ美乳を揺らし、フタナリチンポをふりふりしながら、最低のおねだりをしてしまう。

『ウンコウンコってバカかコイツ』『本人は真剣なんだから笑っちゃ悪いよなw』『いや笑うだろこれは』『人として終わってるぜw』『お嬢さまでもウンコは臭いんだってよw』と視聴者からも嘲笑され、恥辱に意識が遠のきそうだ。

そして、運命のアンケートがスタートした。

散々恥をかいたクリスの結果は、

【結果。A、トイレに行かせる　59％　B、トイレに行かせない　41％】

「やった！　やりましたわ！　トイレに行って構いませんのね。今すぐ鎖を外しなさい！」

結果に歓喜し胸を撫で下ろす。
痛む下腹を最後の精神力で抑え込み、卑劣な調教者に命令する。
しかし、妖月は一ミリの落胆も見せず、次なる手段に出た。
「お喜びのところ悪いけど、まだ一つ質問が残っているよ。アンケートスタート」
【投票。A、ここでオマルに排泄させる　B、奥にある洋式トイレに行かせる】
薔薇のような美貌から血の気が引く。
「そんな……う、嘘でしょう!?　卑怯ですわよ！　わたくしは認めませんからね！」
「それも含めてすべてお客さまが決めることさ。さあ、結果が出るよ」
（B！　絶対にBですわ！　そうに決まってます……！）
Bが勝つことを神様に祈る。今のクリスにはそれしかできない。信じる者は救われると思い込むしかない。
そして結果が示された。
【結果。A、ここでオマルに排泄させる　94％　B、奥にある洋式トイレに行かせる　6％】
「い、いや……」
最悪の回答が表示される。画面は嘲笑するコメントで埋め尽くされ、虹色に染まっていた。

絶望が限界の桃尻を襲い、下腹から聞こえる轟音は落雷のように凄まじい。

ギュルル！　グルル！　ゴギュルル！　グギュルル！　グルル！　グルルルルッ！

「や……あぁ、いやあああああぁぁぁ!!　こ、ここで排便するなんて！　生中継されながら漏らすなんて絶ッ対に嫌ですわ!!　ゆ、夢ですわよね!?　こんなの現実じゃありませんわ！」

「ごちゃごちゃうるさいねぇ。お客さまが決めたんだ仕方がないだろう。ほら尻を突き出しな♥」

「あああああぁぁあああああああああッ!!」

イヤイヤとかぶりを振るクリスだが、アンケートの結果には逆らえない。

ぷりんっとお尻を突き出し、用意された白鳥のオマルに菊門をロックオンする。座ることは許されず中腰の体勢を強要される。

薄ピンク色のアナルがヒクヒクと蠢き、ムクリと皺を伸ばして孔を開いた。情けないオナラがぷうぷうと漏れ、破滅へのカウントダウンを始める。

そして、溜めに溜め込んだ汚泥が凄まじい臭気と共に解放された。濁流のような轟音が部屋中に響き渡り、マイクとカメラに拾われる。

ブ、ブリュリュウウウウウウ！　ブリッ！　ブリュ！　ブリュリュ！　プウゥ

〜！

「いやぁぁぁぁぁぁぁ♥　見ないで♥　見ないでええぇぇぇぇぇぇ♥　で……でる♥　でてるっ♥　でちゃってますのおおおお♥　ウンコ漏れてる♥　ウンコ漏らし生中継しちゃってますのおぉおおおぉお♥　オマルに公開生ウンコしてますの♥　くっさい♥　くっさいウンコいっぱいでちゃいますわ♥　一週間溜めた便秘グソがでるうううううう♥　おひいイイィィィ♥」

最初に水のようなゲリ便が吐き出され、茶色の液体が噴水めいたアーチを描き、純白のオマルをドロドロに汚していく。

あまりの悪臭に鼻を押さえずにはいられないが、まだこれで終わりではない。

ゲリ便のあとに見事な一本グソがひり出される。

ブリッ！　ブリブリッ！　ブリブリッ！　ブリブリブリッ！　ヌグウウウウゥゥ〜〜ッ♥

「ひいいいいいぃぃぃ〜〜ッ♥　い……一本グソ♥　棒ウンコ♥　アナコンダみたいな極太極長ウンコがでちゃってますのおおぉぉぉ♥　おぐッ♥　ひうぐゥッ♥　チンポ♥　チンポみたいに立派なロングロング大便漏らしてますわ♥　雌奴隷の最低マゾグソがモリモリでてりゅう♥　か……感じる♥　感じちゃいますの♥　脱糞生中継でアクメするうう

うううううぅぅ♥」

金髪縦ロールを振り乱し、排便の快感に溺れていく。倒錯したエクスタシーが身体中を這いずりまわる。排泄の快感でフタナリペニスも刺激され、肉竿が最大限に怒張した。

マゾ金玉がフル稼働し、おびただしい精子が吐き出される。

ボビュ♥　ブブビュク♥　ドバッ♥　ビュババアアァアア♥　ゴブッ♥　ドピュピュピュ♥

「いぐウウウウウゥゥゥウ♥　わ……わたくしチンポもイってますのおぉおおおぉ♥　ウンコしながらチンポでイグ♥　チンポ絶頂しながらウンコでイグ♥　チンポもクソ穴もどっちも最高ですのぉおぉおおお♥　画面の前のお客さまもいっぱい見てくださいね♥　わたくしのドマゾ変態ウンコ射精♥　白濁スカトロアクメ♥　ぶりぶりウンコとぷりぷりザーメンお漏らししてるところを見て♥　クソ漏らしながらザーメンお漏らしする変態戦姫をバカにしてええぇぇぇぇぇ〜ッ♥」

獣のような喘ぎ声でスカトロ射精に溺れるクリスティーナ・エイミス。

カメラに汚れたお尻を見せつけて、たっぷり三分は排泄、射精し石畳に倒れ込む。

オマルの中は汚物がパンパンに詰まり、今にも溢れ出しそうだ。

画面の中では『ホントに漏らしやがった！』『汚ったねぇw』『くっさ』『うわ〜最悪……』

『クリスちゃんウンコ漏らしおめでとう♪』『この動画拡散してやろうぜw』と嵐のような勢いでコメントが流れていく。

「あ〜臭い臭い。臭過ぎるよ装刃戦姫サマ。もう人間じゃないねぇ」

「うぅ……ひっく、最低過ぎますわ……もうお嫁にいけませんわ……」

「泣いているのかい？　ま、あたしだって悪魔じゃないさ。このアンケートで最後にしてやるよ。お客さまに感想を聞かないとねぇ」

画面に新たな問いが提示される。

【投票。A、満足した　B、普通　C、イマイチ　D、こっちまで匂うほど臭かった】

「や、やめなさい！　も、もう……こんなの嫌ですの！」

涙声で止めるように呼びかけるが、女狐は耳を貸さない。

無慈悲にも結果が開示される。

【結果。A、満足した　0%　B、普通　0%　C、イマイチ　0%　D、こっちまで匂うほど臭かった　100%】

「うう……あああ、わあああああああッ!!　あぁぁあ……」

汚物で汚れたお尻を突き出して、慟哭するお嬢さま戦姫。装刃戦姫として、乙女としてのプライドを完全粉砕され、恥辱に身を任せることしかできない。

に漏らしやがった
ｗｗ
汚ったねえｗ
うわーｗｗｗ
くっさ
っあああああ
わ〜最悪……
やりやがった
まじかｗｗｗｗ
しおめでとう♪
ｗｗ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌！
【偶数月】
隔月発売
2・4・6・8・10・12月
二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌！
【奇数月】
隔月発売
1・3・5・7・9・11月
コミックアンリアル
COMIC UNREAL
正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー！
【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月発売！
敗北乙女エクスタシー
Defeat Maiden Ecstasy
あなたのキモチイイをお手伝い！キルタイムのアダルトコミック誌
電子書籍版も好評発売中
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中！
KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208
▶最新情報は公式サイトへ！
キルタイムコミュニケーション
検索

二次元ドリームノベルズ

異世界シャイニングテラーシャ

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

女刑事美優
暴漢は白昼の路上で

リアルドリーム文庫

「小説家になろう」の男性向けサイト
「ノクターンノベルズ」
から書籍化！

姫騎士がクラスメート！

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

異世界でチキる妹

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないエッチ系レーベル

戦うヒロインを屈服させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

フリーダム120%!?
ジャンルにとらわれない
ドキドキ★ラブ！

ザ・ハイスクール・ヒーロー

二次元ぷち文庫

二次元ドリーム文庫

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索